

# IF:仮面ライダージオウ 『アマゾンズ編』

TAC/108

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

何番煎じかも不明ですが『もしも仮面ライダージオウにアマゾンズ編があったら』というネタです。

ジオウ本編の空気感がある程度再現できたらと思います。

あらすじ

仮面ライダージオウであり、普通の（元）高校生常磐ソウゴ。彼には魔王にして時の王者・オーマジオウとなる未来が待っていた。

ニュースで流れてきた凄惨な殺人事件に、アナザーライダーの関与を察知したソウゴ達は、アナザーライダーが出没すると思われる夜間に調査を開始する。

遭遇した奇妙なアナザーライダーは、道行く人々を怪物に変えてしまう恐るべき怪人であったが、乱入してきた謎の影の一助を得てこれを撃退する。

乱入者は仮面ライダーであった。変身を解くと、変身者であった青年はソウゴ達に名乗る。

「僕は水澤悠。あの青い『アマゾン』を追っているんだ」

# 目次

A	A	ア	M	E	C	B	B	A	ア	N	E
P	P	バ	A	P	P	P	P	P	バ	S	P
a	a	ン	Z	??	a	a	a	a	ン	T	??
r	r	タ	O	2	r	r	r	r	タ	E	2
t	t	イ	N	0					イ	R	0
2	1	ト	Z	1					ト	E	1
			O	:						A	:
			N	Z						R	A
			E	O						E	R
			O	F						W	E
			F	O						E	M
49	42	38	A	A	32	18	11	4	1	M	O

C	C	C	C	C	B	B	B
P	P	P	P	P	P	P	P
a	a	a	a	a	a	a	a
r	r	r	r	r	r	r	r
t	t	t	t	t	t	t	t
5	4	3	2	1	3	2	1
143	131	114	101	89	82	68	54

# EP?? 2018 : ARE WE MONSTERS? アバンタイトル

近年稀に見る程の豪雨の日。

夜の街を街灯が照らし、無数の雨粒は明かりを反射して無機質な光を放っていた。

しかし、都心部から少し離れた場所にある、小さな霊園はその限りではなかった。

時刻は午後7時を過ぎている。夏が近いとはいえ、この時間になると夜の帳が降りる。一寸先は闇と言って過言ではなく、懐中電灯が無ければ先に進むどころか数メートル先を見通すのも困難である。様々な事情があり、この付近には街灯が殆ど設置されていないのだ。

霊園の中に佇む男がいる。雨に濡れてとうに火が消えた線香と、『高坂家之墓』と書かれた墓石の前で、静かに手を合わせている。

聖職者の類ではない。彼はこの『高坂家』の一員であり、三ヶ月前に息子を亡くした父親であった。

高坂大介こうさかだいすけ。それがこの男の名である。

年齢は45歳。とある製薬会社の研究開発部門に所属する研究者であり、十年前に妻

を亡くして以来、息子を一人で育ててきた。

彼が今いる場所は、その一人息子・高坂雅彦まさひこと彼の妻の墓前であった。

「りっこ律子……すまない……！　俺が不甲斐ないばかりに……雅彦まで……うッ、ぐううッ……」

絶望と悲哀に打ちひしがれ、合わせた掌はいつしか祈るように組まれていた。何のため、誰に祈っているのかは本人すら分からない。

「そこのお前、一つ話がある」

大介のものではない、別の男の声が響く。野太く、威圧的にも感じられる低い声。驚いて振り向くと、黒い傘を差した大柄な男が立っている。袖の無い紫色のジャケツトという奇妙なファッションだが、不思議と違和感を感じさせない。

いや、違和感を感じるという次元にすら存在しない。突然現れたその男は、まるでそこにいるのが当然であるかのように振舞っていた。

奇妙なのは男だけではない。気づけば、まるで時が止まったかのように、轟々と降り続いてきた雨粒が空中に静止していた。

「だ、誰なんだアンタは……」

「お前の意見は求めん。これからお前には、新しい体験をしてみよう」

紫の男は、懐から腕時計めいた何かを取り出すや否や、大介の胸に手を突き入れた。

「何ッ!?　ぐあっ……ううう、うううぐううア……い!」

妖しい光を放ちながら、男の腕がズブズブと大介の胸に埋まっていく。男はすぐに腕を引き抜くが、出血は一切無い。男の手から腕時計は失われていた。

異常が起きたのは大介の方だ。うずくまって呻いていたかと思いきや、月に吠える狼の如く凄まじい雄叫びを上げ始めた。

「ウウウアアアア……ッ!!」

その瞬間、大介の肉体は変生する。無機物と有機物の中間体めいた、青黒い異形と化したのである。

「さあ行け。籠を外し、悪しき獣達が唾う街へと。本能のままに喰らい尽くせ……!」

紫の男は喜悦を押し隠しながら異形に命じる。その言葉を最後に、掻き消えるように男は姿を消した。

激しい雨音が再び鳴り渡る。豪雨の音に混じって、青黒い獣の雄叫びが何処へともなく響き渡った。

## A Part

午前8時。初夏の日差しが街を照らす朝のことである。

時計店『クジゴジ堂』の店主、常磐順一郎ときわじゅんいちろうは、台所にてその腕を振るっていた。

今日の朝食はシンプルな洋風のものだ。半熟より少し固めに焼いた目玉焼き、小麦のような焼き色がついたトースト、キャベツの千切りやミニトマトなど7種の野菜を盛り込んだサラダ、買い置きしていたものを程よく茹で上げたウインナー。

健全な一日は健全な朝食から始まる、と言わんばかりに様々な料理を作っているが、その上で朝からあまり重いメニューになりすぎないように細かな配慮もなされている。彼の穏やかな人柄が現れた朝食だと言えよう。

皿は各種4人分がテーブルに並べられている。クジゴジ堂の住人達は、今日も何気ない毎日を始めようとしていた。

「悪いんだけど、ソウゴ君達は先に食べちゃってくれる？ 昨日持ち込まれたラジオの修理が終わってなくてさあ……ウチ時計屋なんだけどね」

「分かった。じゃあ食べよっか」

「ああ」



「「「いただきます」」」

かくして今日という日は和やかに始まる……かに思われたのだが。

『臨時ニュースです。都内各地にて、同時多発的に殺人事件が発生。遺体の一部分が欠損した状態になっている他、被害者の同居者達も消息を絶っています。現場は無数の血痕が飛び散り……』

クジゴジ堂の住人の一人、ツクヨミが持っていたタブレット端末が、ニュース番組の映像を映していた。殺人事件に関するニュースだが、現場の映像が全く無い。それだけ凄惨な事件であったということだが……。

「朝から嫌なニュースだ」

ドレッシングのボトルを取りつつ明光院みょうこういんゲイツが呟く。

明光院ゲイツとツクヨミは、2068年の未来からやってきた『レジスタンス』の一員である。彼らは未来にて君臨する『最低最悪の魔王』オーマジオウを倒すため、オーマジオウの正体と目される高校生時代の常磐ときわソウゴの前に現れた。紆余曲折を経て現在は協力関係にあり、打倒オーマジオウを目指すソウゴの頼もしい仲間達である。

その常磐ソウゴはと言うと……ツクヨミのタブレット端末から流れるニュース映像を凝視していた。

「我が魔王、早く食べないと目玉焼きが冷めてしまう。そんなにニュースが気になるか

ね？」

ソウゴの向かい側に座る男、ウオズが言う。彼も2068年の未来から来た人物だ。ゲイツ達と同じくかつてはレジスタンスであったが、現在の立場はオーマジオウの従者……であるらしい。ウオズが詳細を語ったことはほとんどないが。

「ごめんウオズ。とりあえずこの映像を見てくれる？　ツクヨミ、タブレットを貸してくれるかな？」

「わかった」

ツクヨミがタブレット端末をソウゴに手渡す。このタブレットはツクヨミの私物である。そこには路上に設置された監視カメラの映像が映し出されている。画面の中では、スーツを着た男が夜道を歩いていた。

「？　……監視カメラの記録か。何もおかしなところは無さそうだが……ッ!」

ウオズが目を見開く。サラリーマン風の男は急に前傾姿勢になったと思いきや、全身から蒸気を吹き出しながら恐るべき怪物に変身したのである。顔から伸びた長い鼻や牙は、ゾウによく似ていた。

『この奇妙な生命体が、今回の事件に関わっていると見て、警察は捜査を——』

「どう思う？」

ソウゴが尋ねる。

「分からない……私の知る歴史に、あのような怪物がいた覚えは無いのだが……」

ウオズは2068年までの『オーマジオウの軌跡』を記した『逢魔降臨曆』おうまこうりんれきという書物を常に持ち歩いている。これによってウオズは豊富な知識を持つのだが……時折、逢魔降臨曆に記されていない事象が発生する。

今回の件もそうである可能性が高いと、ウオズは瞬時に判断した。

「ウオズが知らんということは、つまり俺達も知り得ない未来から来たか、時空の歪みによって迷い込んだ異物なのか」

「他の映像はあるかな？ 類似する事例から共通点を探してみよう」

ウオズはいつの間にか朝食を食べ終え、ソウゴの後ろに立っていた。ソウゴはツクヨミのタブレットをウオズに手渡す。

「これもアナザライダーの……」

「まだ分からん。だが……仮に科学技術の産物だったとして、あそこまでの変身を行える怪物を作り出すだけのテクノロジーが、この時代にあるとも思えんな……」

アナザライダー。それはソウゴ達が戦うべきもう一つの敵。オーマジオウに辿り着くために、ソウゴ達は『平成仮面ライダー』達の力の結晶たるライドウオツチを集めている。そのアナザライダーの出現は、同時にライドウオツチ獲得の契機にもなるため、この話題に関しては誰もが敏感になる。

アナザーライダーとは、謂わば平成仮面ライダー達の『裏の姿』だ。世界を守った仮面ライダー達から力だけを抽出し、全く別の他者に与えた結果、異様な怪物に変貌を遂げるのだ。

「ウオズー、何か分かった？」

ソウゴが呼ぶや否や、ウオズは音もなく彼の背後に現れる。

「報道で映された監視カメラ映像が複数あつてね。一応の共通項を見出すことはできた。あれらの怪物は全て夜間に覚醒している。そして、各地で行方不明になっている人物は『我蘭製菓』という企業の社員であるようだ。また、いくつかの映像に共通して、青い怪人が映り込んでいる。この件に何らかの関わりがあると見て差し支えは無いだろう」

ウオズはタブレット端末の映像をソウゴ達三人に見せた。静止した画面の中に、左右非対称の影が映っていた。

「暗くてよく見えないわね……」

「仕方ない、本格的な調査は夜に行うことにしよう。ウオズとツクヨミは、その我蘭製菓とかいう企業について詳しく調べておいてくれ」

「君に言われずとも既に調べているよ。では、我が魔王とゲイツ君は……」

言い終わる前に、ソウゴが動いた。少し大きめの黒いリュックサックを用意しながら

ら、彼は言う。

「夜の街で、自分の足で調べないとね！」



午後5時。街を眺望できる高層ビルの屋上に、三人の男女が集まっている。

一人は青い服の少年。一人は銀色の服の少女。そしてもう一人は紫色の服を着た長身の男。

彼らの名はタイムジャッカー。最低最悪の魔王・オーマジオウに代わる『新たな王』を擁立すべく、平成ライダー達の歴史に介入し、アナザーライダーを生み出してきた、未だ来より来たる魔人達である。

「スウォルト、また妙なアナザーライダーを生み出したな？」

青い服の少年が言う。彼の名はウール。この時代、即ち2018年及び2019年において、アナザーライダーを通して最初に常磐ソウゴ達と接触した人物だ。

「いつもの事よ、もう慣れたわ。それで、そのウオッチはどうやって手に入れたの？」

銀色の服を着た少女の名はオーラ。その性格は冷酷にして残忍。高い戦闘能力を持つ、タイムジャッカーの紅一点である。

「簡単な話だ。歴史がオーマジオウの流れから揺れ動いた結果、時空の歪みが発生している。そこから紛れ込む異物もあつただろう。今回は、我々が先んじて奪い取ったとい

うことだ」

ウールに名を呼ばれたスウォルトツという男が答える。タイムジャツカーの首領格であり、他を圧倒する強力な時間停止能力を持つ。ウールとオーラも同様に時間停止を行えるが、それはスウォルトツが分け与えたものだ。

「そんなもの使つて大丈夫なのかよ？　ただでさえ、歴史の流れはオーマジオウの方に向かつてるつていうのに……」

「お前の意見は求めん。しかし興味深い現象ではある。もう一人のウオズやあの男の言つたように、時空の歪みから我々の知らない歴史に繋がるか、あるいはいくつもの時空が混ざり合うという事例だ。オーマジオウの歴史から外れる、別の歴史を創ることもありうるだろうな……？」

スウォルトツが示唆的に語る。彼は決して己の真意を露わにはしない。彼の謀略には何らかの目的が付き纏うが、それが何であるのかを知る者は、この時点では誰一人いない。

「まあいいわ。それで、これからどうするの？」

「我々は何もする必要は無い。既に街には『獣』が解放された。人間が獣を制するのは困難だ。野生のままにしておけば、自ずと結果は現れるだろう……」

沈みゆく夕陽を見つめながら、スウォルトツは密かに笑みを零した。

## B Part-1

午後6時。常磐ソウゴと明光院ゲイツは、ツクヨミ達が調べたいいくつかの情報に基づいて、夜の街に繰り出していった。夜、と言つても時期としては夏に近いため、まだ日は完全に沈みきっていない。

ウオズ曰く、怪物の目撃情報が夜間に集中しているのは確かだという。仮にアナザーライダーが関与していた場合、そして怪物が出現した場合、これに対処するというのも彼らの役割だ。ウオズはツクヨミと共にクジゴジ堂で待機している。

ウオズ達の調査に基づいて、ソウゴ達が辿り着いたのは一棟のマンションであつた。5階建てであり、1フロアごとの室数は7つと、それなりに広い。

「ウオズの調べが正しければ、このマンションに我蘭製薬の社員が何人か住んでいるらしい。うち一人は社の中では高いポジションにいる男だというが」

「もう帰つて来てるかな？」

「さてな。ここを中心に、怪しいものが無いか手分けして探すぞ」

ソウゴとゲイツは二手に分かれて行動を開始した。ゲイツはマンションの入り口で待機し、ソウゴは別方向に向かって走っていく。

ゲイツは懐から携帯電話らしき装置を取り出し、キーを押して電話をかける。相手はツクヨミだ。

「ツクヨミ、例のマンションに着いた。ここから最も近い駅はどこだ？」

『東の方に1キロ。玄道げんどうつて名前の駅があるわ』

「分かった。ウオズは何をしている？」

「怪物がクジゴジ堂に来ることは無いって言って、玄道駅に向かった」

「何だと？ ……仕方ない、駅周辺はウオズに任せて、俺はマンションで待機する」

通話終了。気づけば夜の闇を纏い始めた空に、黒い雲がかかり始めていた。



ソウゴはマンション付近を自身の所有するバイクで走り回っていた。バイクの名はライドストライカー。彼やゲイツが所持する『ライドウォッチ』の一つで、バイクへの変形機構を有した特殊仕様のものだ。

ソウゴの背中には、黒いリュックサックが背負われている。このリュックサックには、携帯食料や非常用ラジオだけでなく、スマートフォンや携帯式バッテリーなど様々な道具を詰め込んでいる。

マンションを中心として、半径1キロ圏内を巡回する。ゲイツからの連絡によって、近場の駅はウオズが押さえたとは知らされており、ソウゴは帰宅途中のサラリーマンや学



生達、その一人一人に可能な限り目を光らせている。

ある程度走り回って、少し開けた場所に出た。滑り台やブランコなどの遊具、うず高く山めいて盛られた土を見るに、公園であるらしい。

ライドストライカーをライドウォッチに戻して、ソウゴは公園に立ち入った。

時刻は午後7時。人気はほとんどない。

「さすがにこの辺りには誰もいないか……」

そう呟いた、次の瞬間。

「グウウウウ……」

獣じみた唸り声。地の底から響くような重く低い声が、ソウゴの背後から突如発生した。

声を聞くが早いか、ソウゴは身を翻して飛び退がり、背後にいた『何か』を見据える。

白い街灯に照らされたそれは、リクルートスーツを着た人型の異形。鱗めいた肌、黄緑の体色、鞭のように長く伸びた軟体らしき腕……その姿は蛇を思わせる。

「コイツ……監視カメラの映像にも映ってたな！」

調査中に見た、怪物騒動を伝える報道番組。取り上げられた監視カメラ映像に、同じ姿が映っていたのをソウゴは覚えていた。

「何なのか分からないけど、街の人たちに手は出させないよ」

『ジクウドライバー！』

ソウゴが地面に置いたリユックサックから取り出したのは、巨大な腕時計を思わせる装置だ。腰に当てると、バンドが自動的に現れてベルトを形成する。

『ジオウ！』

ソウゴは懐からライドウォッチを取り出し、外郭部分を回転させて起動スイッチを押す。それはバイクに変形するものではない。ソウゴ自身が使うものだ。

ソウゴは腕時計めいたベルト、ジクウドライバーの右側にライドウォッチを装填した。秒針の刻む音は、そのまま次の段階へのカウントダウンを意味する。

何が始まるのか、と問われたならば、その答えは既に決まっている。

「変身！」

『ライダータイム！ 仮面ライダー！ ジオウ！』

状況は一変した。

ソウゴがジクウドライバーを一回転させた瞬間、背後に現れた巨大な結界が彼を守護し、その姿を全く別のものに変えてしまった。

黒、銀色、マゼンタの三色が、力強く鮮やかに総身を彩る。

顔面は時計めいた形状に変わり、左右で長さの違う二つの触角は長針と短針を示している。  
アシテナ

何よりも特徴的なのは眼の部分だ。人間の双眼にあたる部位が、マゼンタに煌めく『ライダー』の四文字によって構成されているのだ。

彼こそは、平成仮面ライダーの力を受け継ぐ、20人目の若き王。

時空を超え、過去と未来をしろしめす時の王者。

その名は『仮面ライダージオウ』。

まさに変身の瞬間である。

「ハアッ！」

ソウゴ／ジオウが先手を取った。常人を遙かに超える脚力で、一瞬にして蛇の怪人と距離を詰める。右拳を顔面に当て、左足のローキックで体勢を崩した。

よろけながら体勢を整えた蛇の怪人は鞭のように右腕を振るい、ジオウの顔面に横薙ぎに叩きつけにかかる。当たる寸前にしゃがんで回避し、跳び上がりながらアツパーカットを叩き込む。

「ガアアアッ！」

「やった！……でも肌が硬いなあ、だったら！」

『ジカンギレード！ ケン！』

ジオウがジクウドライバーから武器を出現させる。銃と剣の機構を備えた複合兵装、その名も字換銃剣ジカンギレード。

剣モードにて蛇の怪人を斬りつけ、トドメの突きで距離を離す。

「ウグウ……」

「なんか……いける気がす——ぐあっ!? えっ何!?!」

ソウゴが驚愕の声を上げた。背後から凄まじい衝撃を感じたと思いきや、激痛と共に前方へと吹き飛ばされたのだ。蛇の怪人との距離が、近づいたと思えばすぐに離れた。

何が起こった? ソウゴは瞬時に状況を悟る。新手だ。この状況で新たな敵が現れたのだ。

敵のいる方……先程までジオウが立っていた場所に目を向ける。

夜の闇に紛れて、その姿ははっきりと見えない。

しかし、轟音と共に生じた強烈な光が一瞬の間、新たな敵の姿を照らし出した。

一言で言うならば、拘束具の壊れた獣であった。

全身を覆うプロテクターじみた装甲は、ところどころが欠けており左右非対称のフォルムを作っている。

顔面も同様だ。砕け散ったように欠けた、顔の左半分のみを覆う仮面。露わになった右目は赤く、仮面に隠された左目は黄色く光る。顔の右半分から覗く口は、怒りか何かを堪えるように食い縛った歯列が覗く。

筋肉質と言っていないほど全身は太く屈強だ。露出した肌は青黒く、ハリネズミめいて

刺々しい印象を与える。機械的なプロテクターに包まれた右腕とは対照的に、左腕はピラニアのヒレめいた器官がハッキリと見える。

プロテクターに覆われた胸には『AMAZON NEO』『2019』の文字。  
ソウゴは仮面の下で驚きの表情を浮かべた。

この特徴を知っている。ソウゴ達が戦うべき、目下最大の敵。

ソウゴはハッキリとその名を呟いた。

「アナザーライダー……！」

目の前に現れた怪物。それは紛うことなきアナザーライダーである。

仮面ライダー達の『裏』。反転でありオルタナティブ。

あり得なかった、あり得たかもしれない、もう一つの仮面ライダー。

此度のアナザーライダー、その名は。

『AMAZON NEO!』

B Part-2につづく。

## B Part—2

『AMAZON NEO!』

「アマゾン……ネオ? 聞いたことないな……」

仮面ライダージオウ／常磐ソウゴの脳内に疑問が宿る。

平成仮面ライダーにまつわる知識を数多く持ち、それらの知識によってソウゴをサポートしたこともあるウオズからも、そのような仮面ライダーの存在は聞かされたことがない。

ただの一度も、である。

「夢に出てきたこともないし……いや、とにかく応戦しなきゃ!」

悠長に目の前の敵手について考えている余裕が無いのも事実だ。敵が二人に増えた、ということは数的不利という非常に単純な戦力的ハンディキャップを背負ったことを意味する。

ジオウが立ち上がって、近くにいた蛇の怪人に突撃する。その瞬間、ジオウは強烈な衝撃を連続して受けた。

何が起こったか。答えは空中に浮かぶ無数の触腕が示していた。青黒い無数の触腕

は、後方のアナザーライダー……仮称『アナザーアマゾンネオ』が背中から生やしたものだ。一本一本は細いが、見た目に反して威力は非常に高く、ジオウは一瞬にして変身状態を解除されてしまった。

「ま、マズい……！　ここは一度逃げないと……！」

ダメージで全身の動きが鈍る。ここには危険だ、と彼の全身が告げていた。

余裕からか、あるいは単に興味を無くしたのか、後方に控えるアナザーアマゾンネオ。しかし蛇の怪人は待つてくれない。明日のニュースで報道されるのは自分か——と悲壮な覚悟を決めかけた、その時であった。

蛇の怪人の顔面に、黒い影が飛び蹴りを喰らわせたのは。

「何をボサツとしている、ジオウ！　……どうやら相当な強敵らしいな。アナザーライダーは後方のヤツか」

「ゲイツ、どうしてここが」

「何やら騒がしくなってきたからな、怪しいと思って音を辿ったらコレだ」

現れた黒い影、それはソウゴと分担して調査に当たり、マンシオン方面で待機していた明光院ゲイツであった。間一髪、どうにかソウゴは蛇の怪人から逃れ得たのである。

「まだ行けるか、ジオウ？」

「どうか……いや、でも二人ならいける気がする」

「相変わらずだな。だが、信じるぞ」

『ジクウドライダー！』

ゲイツがジクウドライダーを取り出して装着する。遅れてソウゴもベルトを着けた。

「アナザーライダーの方はどうだ」

「まだよく分からない。アーマーで様子を見てみる」

『ゲイツ！』

『ジオウ！』

二人が同時にライドウォッチを装填する。ゲイツのそれは赤と黒を基調とした、ジオウとは異なるものだ。

『ビルド！』

ソウゴが新たにライドウォッチを取り出した。赤と青のライドウォッチ、それは彼が最初に受け継いだ伝説レジェンドの力。フルボトルで変身する天才物理学者のライダー、仮面ライダービルドの力だ。

「変身！」

『ライダータイム！ 仮面ライダーゲイツ！』

『ライダータイム！ 仮面ライダー！ ジオウ！ アーマータイム！ ベストマッチ！

ビルド！』



二人はジクウドライバーを一回転させ、同時に変身を果たす。

ゲイツが変身した姿は、ライドウオッチと同じく赤と黒に彩られた、力強さを感じるものだ。顔面はデジタル時計を思わせる鋭角的フォルムであり、前面を黄色い『らいだー』の四文字が覆う。

ジクウドライバーのデジタル文字盤は『GEIZ』『2068』の文字を表示していた。彼の名は仮面ライダーゲイツ。未来から来たレジスタンス・明光院ゲイツが変身する、強き叛逆の姿である。

そしてソウゴも同様に仮面ライダージオウに変身した……のだが、その傍らに奇妙なヒトガタが現れる。

鋼鉄の鎧一領、といった趣ではある。しかしその見た目から感じ取れる雰囲気はジオウとは全く異なる何かである。

赤と青の胸部プロテクター。両肩から突き出た、赤と青のシリンドラーめいた部品。右腕には錐型掘削機めいた武装が固定されている。顔や膝は何もない空洞で、あからさまにこのヒトガタが、装着するための鎧パーツ一式であることを示していた。

奇妙なポーズを取るや否や、ヒトガタは一瞬で分散して無数の部品に分かれ、ジオウの全身を屈強に鎧として覆う。顔面の『ライダー』の文字に代わって新たに『ビルド』の三文字が刻まれる。

これこそはジオウが『継承』した最初の力。

その名も仮面ライダージオウ・ビルドアーマー。

勝利の法則にて悪を討つ、正義のヒーローの似姿である。

「ゲイツはあの蛇みたいなヤツを！」

「任せろ」

散開、接敵。ジオウはアナザーアマゾンネオ、ゲイツは蛇の怪人と交戦を開始した。

『ジカンザックス！ Oh No！』

ゲイツがジクウドライバーから出現させた武器は、時間敵斧ジカンザックス。斧モードと弓モードへの変形機構を持つ武器だ。

斧による重い一撃が蛇の怪人を襲う。蛇の怪人も負けじと腕を振るうが、先の戦いで  
の消耗もあつてかゲイツが優勢だ。

「弱っているな。ならば！」

『タイムチャージ！』

腕にスナップを効かせて前方に強烈な叩きつけ攻撃を行う蛇の怪人。しかし横に体を逸らして回避したゲイツに腕を掴まれ、蛇の怪人はゲイツのいる方へと引き寄せられる。

「ガアウア!？」

「終わりだ」

『ゼロタイム！ ザックリ割り！』

ジカンザックス・ザックリ割り。ゲイツは蛇の怪人を近くに引き寄せてから、胸元にジカンザックスの刃を押し当て、勢いよく斬り下ろす。続けて放たれる逆袈裟斬りが、致命の一撃となった。

蛇の怪人はよろよろと後退つてから、強烈な発光と共に爆散した。

「よし……っ?!? おい、大丈夫か!?!」

ゲイツが蛇の怪人……だったものへと駆け寄る。爆発と共に現れたのは、リクルートスーツを着た男だった。

「ぐっ……っ……う、うう……」

「(あのアナザーライダーに怪人にされていた、といったところか)……ここは危険だ、早く逃げろ! しばらくは肩を貸してやる……!」

ゲイツは男の腕を自分の肩に回し、公園を後にした。

一方、ジオウはというと。

アナザーアマゾンネオが全身から伸ばしてくる無数の青黒い触腕によって、攻め手に欠くという状況が続いていた。

細長い見た目の割に威力が高く、連続して受ければ致命打になりかねない。せいぜい

がビルドアーマーの右腕に装備された固有武装・ドリルクラツシャー・クラツシャーで応戦するのが精一杯だ。厄介なことに、アナザーアマゾンネオはほとんどその場から動いていない。つまりまだ何か隠している能力があるのだ。筋骨隆々とした両腕は、獲物を前にした肉食獣のように震えている。

「1対1だと相当キツイな……」

『ジカンザックス！ You Me！』

アナザーアマゾンネオの体が、何らかの衝撃によって揺れた。蛇の怪人を倒し、中から現れた男を送り届けたゲイツが、公園に戻ってきたのだ。

「ゲイツ！」

「攻めあぐねているようだな」

「ああ。そうだゲイツ、コレ使ってみて！」

ソウゴがゲイツにライドウオッチを投げ渡す。赤・黄・緑の三色が眩しい。

「機械には機械、獣には獣の力。ならメカっぽい獣には？」

「両方で挑む、か……良いだろう、使ってみせる」

『オーズ！』

ゲイツのジクウドライバーの左側に新たなライドウオッチが装填された。

ベルトを回転させ、新たな力を呼び起こす。

『アーマータイム！ タカ・トラ・バツタ！ オーズ！』

ゲイツの背後に、ジオウのそれとは異なる鎧が現れる。ライドウオッチと同じく赤・黄・緑の三色が眩しい、特殊な形式のアーマーだ。

翼を広げたタカを思わせる形状の兜、トラめいた爪型の武装を右腕に備える胴体の装甲、バツタの如きジャッキ機構を持つ脚部装甲。ゲイツがそれらを全身に纏うと同時に、ゲイツの顔面に『おーず』の文字が嵌め込まれる。

タカ・トラ・バツタ、三色のコアメダルにて変身する仮面ライダーオーズ・タトバコンボ。その力がかつてジオウが受け継いだが、こうしてゲイツに貸し与えられた。

即ち、仮面ライダーゲイツ・オーズアーマー。

「一気に攻め込むぞー！」

「ああー！」

ゲイツが突撃し、次いでジオウが背後を狙う。数的有利はこちらにあり、負けることはあり得ないと確信したゲイツが、右腕の虎爪をアナザーアマゾンネオに向ける。

アナザーアマゾンネオは触腕を敢えて引つ込め、近接戦闘に対応するためゲイツを相手に真正面から殴りかかった。拳と爪が衝突し、衝撃に互いの距離が離れる。

アナザーアマゾンネオは右腕のプロテクターを展開させ、触腕を束ねて一本の剣を形成した。ゲイツの爪とアナザーアマゾンネオの剣。共に腕から直接に振るう武器だが、

リーチではアナザーアマゾンネオが勝る。激しく連続する剣戟の音。ゲイツの攻勢が速度を増し、アナザーアマゾンネオが力任せに応じる。

間断無き激戦を演じること、それ自体がゲイツの作戦である。本命は既に背後に回り込んだジオウだ。

『フィニッシュタイム！ ビルド！』

ジオウがベルトを操作し、必殺のタイミングを測る。ゲイツは僅かな隙を見て、アナザーアマゾンネオの背後にいるジオウを見遣った。左の肘打ちを首筋に当て、続いて右腕の爪でアナザーアマゾンネオの剣を搦め捕った瞬間、ゲイツが叫ぶ。

「今だ、ジオウ！」

「オツケー、勝利の法則は……決まった！」

『ボルテック！ タイムブ레이크！』

ジオウとアナザーアマゾンネオが、一直線上に並んだ。点と点が結ばれた巨大な直線のグラフが現れ、ジオウが線上を滑走しながらアナザーアマゾンネオに迫る。反撃が来るより速く、ドリルによる強烈な刺突が、アナザーアマゾンネオの体を宙に打ち上げた。

「ゲイツ！」

「分かってる！」

『フィニッシュタイム！ オーズ！ スキャニング！ タイムバースト！』

続いて今度はゲイツが飛び上がる。タカ・トラ・バツタの三色メダルを模したエネルギーリングを通り抜けて、ゲイツのドロップキックが空中のアナザーアマゾンネオに突き刺さった。二連続で必殺の攻撃を受けたアナザーアマゾンネオは、地面に叩きつけられる。

「まだ倒せていない、気を抜くな！」

「そうだね……！」

アナザーライダーを倒すことが出来るのは、同じライダーの力を持つ者だけ。あるいは、それらの相関から外れた形態になる必要がある。

「ぐ、ウウウ……」

「バカな!？」

「変身解除すら出来なかったの……!？」

ジオウとゲイツが再び戦闘態勢を取った。予想以上の耐久力だ。かつてない強敵の予感を察知しながら、慎重に距離を詰めようとした、その瞬間。

アナザーアマゾンネオが、ジオウ達に背を向けて、全く別の方向に目を向ける。

「どういうことだ……逃げるともりか？」

「いや……ゲイツ！ アレ見て！」

ジオウが指差したのは、アナザーアマゾンネオの視線の先。自分達の戦いを見てい

た、リクルートスーツを着た中年の男。

「まさか、我蘭製薬の社員か!？」

「このままじゃマズい! 止めないと!」

ジオウが全力で走り出す。アナザーアマゾンネオは、右腕から銃口めいた機構を展開し、スーツの男を狙っていた。

「やめろオーーツ!!」

間に合え、間に合え、間に合え。ただそれだけを考えて走る。ドリルクラツシャークラツシャーの先端を背中に突き入れれば、止められる。そう信じて突っ走る。

しかし。

「レエエイイイジイイオーーツ!!」

無言を貫いていたアナザーアマゾンネオが、初めて声を上げた。

銃口から、青い弾丸が放たれる。

弾丸は過たず、スーツの男に突き刺さった。

『レイジ』。その叫びは、スーツの男に向けられたもの。男の名前であろうか。今のソウゴやゲイツに、そこまで考えるだけの余裕は無かった。

異変はすぐに発生した。スーツの男……レイジが腹を押さえて苦しみます。レイジの肌に、青黒い血管めいた模様が浮き出た瞬間、彼の体から蒸気が噴き出し……怪物へ



と変貌した。

「ぐ、アアア……………」

「そんな……………」

「遅かったか……………」

紫色の肌。鋭い嘴と指の爪。ギリリと闇の中で光る双眸。先程までただの人間だった男は、一瞬にしてハゲタカめいた怪物へと成り果てたのだ。

やがて絶望の雨が降る。望みを絶たれたが如く、雷鳴を伴って空が哭き叫ぶ。

再びの惨劇を繰り返すまいと、ジオウ達はハゲタカの怪人に襲いかかった。しかし、アナザーアマゾンネオがそれを許さない。触腕を無数に飛び出させ、ジオウとゲイツを打ち据える。

我を失ったように雄叫びを上げるハゲタカの怪人は、マンシヨンがある方へと歩いていく。彼にも家族がいるのだろう。その家族は、これから最も親しき者によって無惨にも殺害されるのだ。制止の声は届かない。

もはやこれまでか、アレを止められる者はいないのか。ジオウ達は最早満身創痕である。動けよう筈がなかった。

獣の吠える声が聞こえる。獅子の遠吠えめいた、猛々しい鳴動。

……………獅子の吠え声？

「ゲイツ」

ジオウとゲイツは既に変身を解除されていた。激しく雨に打たれ、地面に倒れたままソウゴはゲイツに尋ねる。

「何だ……?」

「アレが何なのかはまだよく分からないけど……鳥つてあんな風に鳴くかな?」

然り。この声は別の何かだ。運命が引き寄せたか、あるいはただの偶然か。

闇夜に四つの目が煌めく。赤と緑の四つ目が、高速でこちらに向かつてきている。疾走する影は、公園の車止めも、その場の誰をも飛び越えて、ハゲタカの怪人に凄まじい体当たりを喰らわせた。

影の正体は、異様な形状のバイクと、それに乗ったヒトガタであった。ピラニアを思わせる鋭角的で野生的なデザインのバイクが、駆動音と共に雄叫びを上げていた。先程から聞こえていた遠吠えの正体である。

ヒトガタはゆつくりとバイクから降り、雷光と共にその姿を晒した。赤い双眸、黒い四肢、緑と橙に彩られた力強い肉体。一切の荒々しさを削ぎ落としたように無機質で洗練されているながら、近寄りがたい危険さを併せ持つその姿は、生物として人間を超え、一つの極致に至ったナニカであった。

「仮面、ライダー……?」

「ヤツは……一体……」

疑問の声を他所に、緑の影は風を切って走り出した。

## C Part

「仮面、ライダー……？」

「ヤツは……一体……」

緑の影はバイクの突撃を受けて吹き飛んだハゲタカの怪人に向かって駆ける。ハゲタカの怪人が起き上がると、彼は立ち止まって構えを取った。

両手を開き、腰を落とした独特の構え。解放と制御の狭間、人にして獣たる者は静かに躍り寄る。

両者が動いたのはほぼ同時だった。跳躍の後、空中から躍り掛かったハゲタカの怪人は、鋭い爪で緑の怪人を引き裂こうとした。緑の怪人は、体を捻って上段に回し蹴りを放った。

金属の衝突するような音が響く。次いで骨肉の碎ける音。ハゲタカの怪人が撃墜され、腕を押さえて蹲っていた。起き上がりざまに殴りかかるも、顔面にパンチを喰らってよろめく。その隙を逃さずに緑の怪人は腰に巻いた機械的な装置の右ハンドルを引き抜いた。

『VIOLENT BREAK』

装置の容積を超えた質量の槍が、黒い液体を纏って現れる。前蹴りで距離を離して勢いよく投げつけると、槍は直線軌道を描いて易々とハゲタカの人を貫通した。

一瞥をくれてやることもなく、緑の怪人はアナザーアマゾンネオの方を向いた。緑の怪人の背後で爆発するハゲタカの人を見遣り、怒りに満ちた唸り声を上げる。

「ウウウウ……！」

爆風で飛ばされてきた槍をキャッチし、緑の怪人は腰の装置に槍を収納する。二匹の人獣が、静謐の中に凄まじい暴力を隠しながら、一步一步距離を詰めていった。

アナザーアマゾンネオが動く。右腕に形成したフックロープを凄まじい速度で飛ばしてきた。緑の怪人はそれに対して、武器を収納したのとは逆の——左ハンドルを捻る。

『VIOLENT PUNISH』

黒い左腕が備える、魚のヒレめいた器官が肥大化した。飛んできたフックロープを右腕で掴み、生体凶器と化した左腕で切断、続いて前方に跳躍して斬り抜ける。一瞬の出来事だった。

刀の血振りめいて左腕を振るう様は、どことなく残心を思わせた。

「強い……！」

「敵だとすれば手強いな……！」

ソウゴとゲイツは起き上がって、この戦いの一部始終を目撃していた。アナザーアマゾンネオとの戦いに乱入した緑の怪人。相当な実戦経験を積んでいるのか、僅かな動きでアナザーアマゾンネオをも変身解除に追い込んでしまう戦闘能力は、敵に回せば恐ろしいことこの上ない。

「ア、グうあ……アア……！」

身体の許容域を超えたダメージ。ついにアナザーアマゾンネオはその変身を解かれた。

「ぐ、う……まだだ、まだ終わっては……！」

アナザーアマゾンネオであった中年の男は、目の前の事態には目もくれずに何事かを呟いていた。

「そうだな。まだ終わってもらっては困る」

男の言葉に呼応するように、新たな男が現れる。それと同時に、先程まで降り続いていた豪雨の音が止んだ。

雨が止んだのではない。雨粒一つ一つが、空中に静止している。

時間が止まっていた。その場の誰もが停止している。アナザーアマゾンネオであった男と、新たに現れた男を除いては。

即ち、タイムジャッカー・スウォルツである。スウォルツは変身解除時に転がり落ち

た、紫色のライドウオッチを拾い上げる。

「お前がお前の目的を果たすための方法は簡単だ。より強くなれ。他者の運命を喰らってでも生き延びてみせろ。物食わぬ生命の限界は浅いものだ」

『AMAZON NEO!』

「ああ……！」

紫色のライドウオッチ、それはアナザーライダーの変身用ライドウオッチだ。アナザーウオッチを再起動させたスウォルツは、アナザーアマゾンネオであった男にウオッチを埋め込んだ。男は再びアナザーライダーとなつて、次の目標へ向けて何処かへと跳んでいった。それを見届けたスウォルツも去ると、止まっていた時が動き出した。

ソウゴとゲイツは結果として、アナザーライダーを取り逃がすこととなつた。タイムジャツカーの介入に対応出来なかつたことで、せつかく掴みかけていた手がかりは失われてしまったのだ。

「今の感覚は……タイムジャツカーか!」

「アナザーライダーも逃しちやつたね……」

「怪物にされた男から、何か話が聞けるかもしれん。行くぞ」

ソウゴ達は立ち上がり、ハゲタカの怪人だった男の方へ向かう。後方へと吹き飛ばされたためか、離れた位置にいる。緑の怪人はいつの間にか姿を消していた。

「待つてください」

響く第三の声。若い男の声だった。何者かが、ソウゴとゲイツを背後から呼び止めたのだ。

「えっ?」

ソウゴが振り向くと、黄土色のファークートと緑色のジーンズを着用した若い男が立っている。髪は茶色で、どこか幼さすら感じさせる端正な顔立ちだが、その瞳には強い意志が宿っている。

「貴方達は、アレを追っているんですか?」

「そう……ですけど」

「待て。一つ聞かねばならんことがある」

ゲイツがソウゴを腕で制止し、一つの問いを投げかける。

「お前は、誰だ?」

その問いに対して、青年は決然と事実を述べる。

「僕は水澤悠みずさわはるか。あの青い『アマゾン』を追っているんだ。そして、僕も人間じゃない。アマゾンだ」

アマゾン。それはとある異聞に語られる人喰いの怪物。ある時は街に放たれ、ある時は人間すらアマゾンと化して、様々に生きていた種族である。



彼こそは、ヒトの遺伝子を受け継いで作られた『第三のアマゾン』  
人喰いの新たな階梯にして、完成<sup>オ</sup>形<sup>メ</sup>へと至ったモノ。  
彼の名は、仮面ライダーアマゾンオメガ／水澤悠。  
次回へつづく

# EP?? 2019 : ZONE OF AMAZONZ アバンタイトル

「僕は水澤悠。あの青い『アマゾン』を追っているんだ。そして、僕も人間じゃない。アマゾンだ」

常磐ソウゴと明光院みょうこういんゲイツは、降りしきる雨の中で一人の青年と向かい合っていた。青年の名は水澤悠。人間の見た目をしているが、その正体はアマゾンと呼ばれる人工の生命体だ。

……と、彼は名乗ったのだが。

「アマゾン……って何？」

「さつき君達が戦っていた怪物。あれがアマゾンだよ」

「そして、あのアナザライダー……アマゾンネオという名前のようにだが、ヤツもそのアマゾンなのか？」

悠は首肯する。彼は『アマゾン』という生命体は何であることを語った。

人間が作り出した、細胞から生まれた生命体であること。

人肉を食する習性を細胞レベルで保有していること。

それを作ったのが、野座間製薬のざませいやくという製薬会社であり、ある事故をきっかけとして、4000匹もの実験体が街に放たれ、野座間製薬とアマゾンの暗闘が繰り広げられたこと。

さらには、新種として生まれた『人間をアマゾンにしてしまう』細胞まで現れたこと。『溶原性細胞』と呼ばれる、人間をアマゾンにしてしまうアマゾン細胞。一般的な病原体ウイルスと違って、二次感染はしないから、『根源』オリジナルが存在する。その一人が、君たちの言うアナザライダーによく似た姿をしていたんだ」

悠は自分が『オリジナル』ではないことも含めて、ソウゴ達に伝えた。溶原性細胞は既に根絶されており、本来は存在しないはずのものであることも。

自らの境遇を粗方話し終えたところで、悠は何者かが後ろから駆け寄ってくる気配を感じた。身を翻すと、ハゲタカの怪人……ハゲタカアマゾンにされたスーツの男が立っていた。

「君は……あの男が何者になったのか知っているのか!？」

男は半ば継るように悠に尋ねる。何があったのか。

「……す、すまない。自己紹介がまだだったな。私は我蘭製薬研究開発部門主任の、守衛もりえ礼二れいじという者だ」

「(我蘭製薬!)」

「やはりな……アナザーアマゾンネオは無差別に人々をアマゾンに変えているワケではないらしい……」

守衛礼二と名乗った男は、悠に名刺を渡す。雨で濡れていたが、確かに名刺には彼の所属が示されていた。

「礼二さん、で良いですか？ ああ怪物が何者なのか、ご存知で？」

「ああ……彼は、私の同僚だった男だ。名を高坂<sup>こうさか</sup>大介<sup>だいきすけ</sup>。大介は、息子共々私と同じ部署にいた」

高坂大介。その名前をソウゴ達<sup>そうご</sup>が聞き取った瞬間、彼らの背後に人影が現れる。ウオズだ。

「いつまでも濡れ鼠になっているわけにもいかない。今日は一度退くことを進言するよ、我が魔王にゲイツ君」

「ウオズ!? びつくりしたあ……今まで何してたの?」

「<sup>げんどう</sup>玄道という駅を張っていたのだが、連絡が取れなくなつたので別方向で動いていた。興味深い調査結果が出たので、詳しくはクジゴジ堂で話そう。そこの君!」

ウオズが声を張り上げて悠を呼び止める。

「貴方は一体……?」

「それは後々話すでしょう。すまないが、その男の身柄を我々に——」

「待って、ウオズ」

ソウゴがウオズを制止した。ウオズはソウゴの後ろへと退がる。電子的なクラシック音楽が流れ始めた。守衛礼二が自分のポケットからスマートフォンを取り出す。

「もしもし……ああ、遅くなつてすまない。すぐに帰る。それと……これから来客があるんだが……わかった。ありがとう」

礼二の通話が終わった。何やら妙な雰囲気になつてきたな、とゲイツが独り言ちる。

「お二人さん、名前は？」

突然、ソウゴとウオズは礼二に名を問われた。

「……えっ、あ、俺？ 常磐ソウゴです」

「私はウオズ。彼の同居人です」

ソウゴとウオズの自己紹介を受けて、礼二は信じ難い提案をしてきた。

「ソウゴ君と、ウオズ君か……これ以上帰りが遅くなると、家族が心配する。せつかくだしウチに来ないか？」

数秒の沈黙。

「はい……え？ 今、なんて？」

その場の誰もが啞然としていた。

## A Part 1

「い、いただきます……」

夕食は静かに始まった。ソウゴはテーブルの上に置かれた食器をどこか落ち着かない風に見つめている。

ウオズはというと、特に遠慮することなくフォークを手に取り、サラダを食べ始めていた。

夕食のメニューにこれといった特殊性はない。ほどよく焦げ目の付いたハンバーグ、キャベツの千切りやキュウリの漬物にトマトを混ぜ込んだサラダ、炊きたての白米に赤味噌を用いた味噌汁。少し量が多いが、何かが決定的におかしいというものではない。

だというのに、普段は大胆なところのある常磐ソウゴが妙に所在なさげにしているのは、彼が置かれた状況が特殊なものであったからだ。

ここは、クジゴジ堂ではない。

「ソウゴ君と、ウオズ君か……これ以上帰りが遅くなると、家族が心配する。せつかくだしウチに来ないか？」

きつかけは、この一言だった。

人間をアマゾンと呼ばれる怪物に変えてしまう恐るべきアナザーライダー、アナザーアマゾンネオ。その変身者について何かを知っているという男、もりえれいじ守衛礼二に招かれて、ソウゴとウオズは現在彼の家で夕食をとっている。

何が目的かは謎だ。しかし、アナザーライダーに関する何らかの情報が得られるというメリットは無視できないということで、ソウゴとウオズはこの誘いを受けることにした。

水澤悠と明光院ゲイツは二人でクジゴジ堂に向かった。悠の側からも事態を説明してもらい、クジゴジ堂で待つツクヨミと情報を共有する必要があるからだ。クジゴジ堂店主であり、ソウゴの保護者でもある常磐順一郎じゆんいちろうに連絡を取った後、ソウゴとウオズは守衛家に上がることとなった。

守衛礼二には、もうすぐ5歳になる娘と、10歳年下の妻がいた。礼二の年齢は45歳。彼は現在、我蘭製薬の研究開発部門で主任を務めている。アナザーアマゾンネオに変身しているのは、彼の同僚であった高坂大介こうさかだいすけという男だと、ソウゴ達は説明された。

ソウゴの向かいには礼二が座っている。礼二は冷めかけたハンバーグを食べ始めていた。

「どんな人だったんです?」

「とても勤勉で、生真面目で、責任感の強いヤツだった。何をやるにしても『自分がやら

なきや』と率先して動けるし、そんな彼を見て勇気を奮い立たせる研究員も見てきたよ。私もその一人だったさ……ただ、あの事故を経てからは、もうそんな姿は見られなくなってしまうたがね」

「あの事故？」

礼二は少し表情を暗くした。僅かな機微を読み取つてか、ウオズが先んじて語り始める。

「今からおよそ3ヶ月前、我蘭製薬の研究所で爆発事故が起こった。薬品と可燃性ガスの化学反応や、対応の遅れが原因で想定以上に延焼し、火元となった研究施設は全焼したが、被害者は一人もいなかった。これが事件の概要……でよろしかったかな？」

ウオズが事前に調査していた内容とは、我蘭製薬にまつわる事柄だったようだ。礼二は首肯した後、別の真実を語る。

「概ね真実だ、一つを除いては。あの火災の犠牲者は13人もいた。だがその事実報道されなかったのさ」

「そんな……どうして!?!」

礼二は続ける。

彼はその頃、新薬の開発計画のプロジェクトリーダーとして働いていた。部署は同じだが勤める施設が違ったために、礼二は詳細を知るのが遅れたのだが、自社の研究所で



大火災が発生したということだけは辛うじて知ることができた。その施設には、同僚である高坂大介の他にも多くの研究員がいた。高坂大介の息子、高坂雅彦まさひこも。

「私はすぐに大介に連絡を取った。大介は生きていた。けれど、電話口から聞こえてくる声は、それまでの活動的なアイツとは違って、私は『何があつたんだ?』と尋ねた。大介は一言だけを告げた」

——雅彦が、死んだ。

その言葉だけを残して、通話が終わったという。

「雅彦君はとても優秀な人材だった。人好きのするかわいい後輩でもあつた。いつか親父のような立派な研究者になって、凄い薬をいっぱい作るんだと、雅彦君はずつと言っていた。ようやつと、親父さんと同じ職場で働けたつてのになあ……雅彦君が亡くなつて、大介は変わってしまった」

そこから礼二が語つたのは、一人の男が直面させられた、あまりに残酷な真実だった。高坂大介の一人息子・高坂雅彦を含む13人は、爆発事故にて命を落とすこととなつた。

しかし、当時の我蘭製薬は開発中の新薬についての発表を控えており、この一件について『被害者なし』と報道するように仕向けた。社のイメージダウンを防ぐためである。我蘭製薬は国内でもそれなりに影響力のある企業であつた。礼二がこの真相を知つた

のは、不自然なカネの動きを様々な角度から見た情報——株価の変動や社内資料を基に察知したからだ。

結果として、13人の犠牲者は存在ごと闇に葬られることとなったのである。これに最も憤ったのが、高坂大介であった。

しかし、現実是非情であった。社内告発など通用しない。情報をリークする意味はない。表に出る前に、どこかで必ず情報の流れが止まる。同じことを試した遺族達が出たことは推測するまでもないことだ。彼らがやったことと同じことをして成功するはずもなかった。

何も起こらぬまま2ヶ月が経過した。その頃には彼は研究所に滅多に顔を出さなくなっており、不思議がる研究員こそいたものの出来る限り触れないようにしていたのだという。

爆発事故そのものは故意に起こされたものではない。故に、彼らはこの恐るべき事故に隠された真実に触れないことで忘れようとしていたのだ。

そして今月。研究員達が次々と失踪し、人間を喰らう恐るべき怪人と化す事件が発生した。

守衛礼二は事件が初めて報道される数日前に、研究所で高坂大介を目撃した。礼二はそこで見てしまった。青黒い怪物に変身する大介と、怪物が研究員を別の怪物に変えて

しまう場面を。

「以上がこの事件に関して言える、私の知りうる全てだ」

礼二は語り終えると、ハンバークの残りを口に放り込む。静かに「ご馳走様でした」と呟いて、ソウゴ達の方を向いた。

「礼二さんは……どう思ってます？」

ソウゴが尋ねる。礼二は事件に至るまでの経緯を語る最中に、何度か苦しげな表情をしていた。残してきた後悔が滲み出るかのように。

「私は……何もしてやれなかった。いや、何もしなかったんだ。それが大介のためだと思つてな……私も若くはない。娘と妻を養つていかねばならん。事を荒立てるよりも、時間が解決すると信じてしまったよ……けれど、違つたんだな……！」

礼二の皿に水滴が落ちる。泣いていた。45歳の男が、見苦しくも思えるほどに、悔し涙を流していた。

「私は結局、アイツから……大介から手を引いたに過ぎない。一番辛かったのは大介だ、俺達は大介に助けられてた。だというのに、易きに流れて俺は手を引いた！ 助けたいと思うなら……俺は大介から手を引くべきじゃなかったんだ……！ アイツが辛い時に側に居てやるべきだった……！」

時間が自然と解決する、という安易な考えが今回の事件を招いた。礼二はそう思つて

いた。自分の甘さや臆病な心が、親友を怪物にしてしまったのだ、と礼二は嘆く。

「礼二さん」

ソウゴが優しく語りかける。一切の曇りなく、決然とした眼差しで礼二を見つめている。

「まだ遅くない。もう一度だけチャンスがあるって言ったら、信じますか？」

「……本当か？」

ソウゴの言葉を聞いた礼二は、絶るような目で目の前の青年を見上げた。ソウゴは彼に一つの秘策を授ける。危険な賭けだが、全く希望がないではない。

「さすが我が魔王。とはいえ、本当にそんな試みが成功するかどうか……」

ウオズがやや呆れ気味に言う。ソウゴは自信満々に返した。

「それを成功させるのが、俺達の役目でしょ？」

A Part 2につづく。

## A Part-2

午後8時。激しく降り続いていた雨は、その勢いを弱めつつあった。

水澤悠と明光院ゲイツの二人は、ゲイツが住まう時計店クジゴジ堂に帰ってきていた。

全身ずぶ濡れでドアを開けた際には、出迎えたツクヨミと順一郎に大層驚かれたものだが、何はともあれ彼らは現在遅めの夕食をとりながら、現状について話していた。

青黒いアナザーライダー……アナザアマゾンネオとは何者か？

これは悠からの質問であり、ゲイツも同様の疑問を抱いていた。

人喰いの怪物・アマゾン元にして生まれたアナザライダー。人間をアマゾンに変えてしまう能力自体は、悠の語る溶原性細胞に由来するものと断定しても良いだろう。もつとも、悠からすると『アマゾンネオ』という名前にも驚きがあったようだが。

しかし、悠の語るそれは不可逆の変化だ。人間からアマゾンになることはあっても、アマゾンになってしまった人間が、人間に戻ることはないという。

では……今回のアナザアマゾンネオは？

「分からんな……もう一度同じ人間が、アマゾンになったのを見たことは？」

「それが無いから、少し気になっていて……以前にも何度かあいつが生み出したアマゾンと戦ったけど、人間に戻ったらそれっきりだった。話のわかる人には、血液検査まで受けてもらったけど、何も反応は出なくて……」

「アナザライダーだからとはいえ、力を完全に再現してるわけじゃないってことなのかしら」

「どうだろうな……」

「お待たせ。ハルカ君、だったよね？ ソウゴ君と、ソウゴ君のお友達の方がいるからさ、食べちゃってもいいよ！」

話が迷宮入りになりつつあったところに、常磐順一郎がやってきた。彼が悠に出した皿には、和風ソースをかけたハンバーグが乗っており、部屋の電灯を反射して光っていた。微塵切りにした玉葱をソースに混ぜ込んでいるのが順一郎の工夫である。

「いただきます……」

悠は掌を合わせ、フォークでハンバーグを突き刺して口に運ぶ。

「……美味しい！」

「本当！ 嬉しいなあ……いやね、急にソウゴ君が『お呼ばれしちゃった』なんて連絡してくるから、作ったハンバーグが残っちゃってさ。助かるなあ……うんうん、やっぱり若い子は食べて育つねえ！」

ある意味では、順一郎がこの状況に一番順応していると言えた。無闇矢鱈と詮索してこないあたりに、人生経験と人柄の穏やかさが出ているのかもしれない。

ともかく腹ごしらえである。頭脳労働は、その後だ。



とある高層ビルの屋上に、傘を差しながら立つ人影が一つ。

雨の中で佇む男は、ビルの屋上から街並を睥睨していた。タイムジャッカー・スウォールであった。

雨が空中で静止する。二人のタイムジャッカー、ウールとオーラが姿を現す。

「風情というものは無いのか？」

スウォールはウール達に振り向くことなく言う。

「風情だなんて、冗談。あのアナザライダー、全然制御してないみたいだけど、本当に大丈夫なのよね？」

オーラが問う。その疑問は当然であった。アナザライダーはそもそも、オーマジオウに代わる新たな『王』を擁立するために、タイムジャッカーが生み出したものだ。つまりタイムジャッカーにとって最も都合が良いのは、傀儡として行動を統制できるアナザライダーである。

「心配は無用だ。そもそもアレは制御など出来ん」

「待てよスウォルツ！　じゃあ何のためにアナザーライダーを作った!？」

ウールが声を荒げる。また何か自分達の与り知らぬところで、妙なことを企んでいるのではないかと、ウールは疑っているのだ。

「今回のアナザーライダーは、それまでとは違う意味を持つと言っている。そのまま王になるもよし、あるいは王にならずともよしというヤツだ」

「どういう意味だ?」

スウォルツは傘を閉じ、夜空を見上げる。ウール達もそれに倣って空を見上げると、空にあるはずの無いものが現れていた。

穴である。紫色の暗雲が渦を巻き、中心部にはどこまでも続く暗黒が覗く。まるで何処か別の場所、別の時空に繋がっているかのように、穴が開きつつある。

「何だよアレ……!?!」

「お前達にも教えてやろう。アナザーアマゾンネオは、異なる時空から迷い込んできた異物だ。それに呼応する形で厄介な存在まで招いたが、今回はそれがむしろ、時空の歪みを促進したと言える」

「それが、あのヘンな穴だって言うの?」

オーラは驚きこそすれ表情は変わらない。むしろ側から見れば呆れていた。スウォルツが妙な企み事をするのにも、慣れてきたということか。



「穴、というのは正しくないな。まあ強いて言うならば……門だ。アナザーアマゾンネオが開いた、新たな可能性の扉だ。そういうわけで、しばらくアナザーアマゾンネオは放置する。その結果、ヤツ自身が——」

スウォルツは空に、闇の門に手を伸ばしながら言った。

「異なる時空への門となるやもしれん」

B  
P a r t — 1

夜が明けて、午前9時。

ソウゴ達は守衛家に泊まることとなった。互いにある程度の情報交換をしているうちに、いよいよクジゴジ堂に帰るにも遅すぎる時間帯になってしまったからだ。マンションの一室であったために寝室が限られたのに加えて、ソウゴ達は来客の身ゆえに遠慮し、リビングの床で寝た。その後、ソウゴが礼二と電話番号を交換し、彼らはマンションを後にした。かくして彼らはクジゴジ堂へと戻ることとなる。

未知にして不可思議のアナザーライダー、アナザーアマゾンネオを倒す。それが今回の目的だ。だが、ソウゴはそれだけで終わらせるつもりなど毛頭なかった。アナザーアマゾンネオの変身者、高坂大介を怪物の道から人の道へ戻さねばならないとソウゴは決意した。それが『最高最善の魔王』を目指す常磐ソウゴの、今回果たすべき責務であると認識していた。

クジゴジ堂へ帰ると、常磐順一郎とツクヨミが出迎える。

「お帰り、ソウゴ君。外泊どうだった？ ヨソの家に迷惑掛けたりして……ないよね？」  
「大丈夫……だと思おうよ！ あれ、そういえばゲイツは？」

悠とゲイツの姿が無い。妙だと思ってソウゴはツクヨミに尋ねた。

「今日もニュースで、例の怪人……アマゾンに関する報道があったの。ゲイツと悠さんは調査に行ってたわ。記録映像に映った場所をいくつか当たってみるって」

「またしてもアマゾンによる事件が発生してしまっただけ。事態は想像しているよりも深刻だった。」

「わかった。ウオズ、俺達も行くぞ」

「我が魔王、一つ提案が」

ウオズがソウゴの前に跪く。彼はツクヨミからタブレット端末を借り受け、地図を画面に表示する。

「恐らくアナザーアマゾンネオは、最終的には我蘭製薬の関連施設を狙うだろう。アマゾンの目撃場所はゲイツ君達に任せ、我々はこちらに行ってみるべきかと」

「指針は決まった。後は自分の足で探るだけだ。早速ソウゴは荷物の整理を始めた。その姿を見て、後ろからツクヨミが呼びかける。」

「二つ言っておくわ。これまでアマゾンの目撃情報は夜間に集中してたけど、今日のニュースでは日中に現れたって報道されてたの。何か変化があったのかもしれない。気をつけて」



午前11時。ソウゴは自らのバイクを駆り、街を巡る。アナザーアマゾンネオの出現しそうな場所を絞り込み、二手に分かれて探す。万が一アマゾンに遭遇した場合は、これを撃破する。アマゾンの変身者から情報を得られるならば、可能な限り情報を得る。かつてハゲタカアマゾンにされた守衛礼二。彼から得られた経験や情報はどれも今回の相手には役立つものであった。

二人で定めた場所を粗方調査し終えて、あらかじめ決めていた合流地点にてソウゴとウオズは再び出会った。

「そっちはどうだった？」

「特に異常は無かった。もしや、と思って警戒を強めてみたが杞憂だったようだね」

周囲を見回す。集合地点は橋の上である。この橋は我蘭製菓の研究施設に近く、何らかの異常が発生した場合に迅速に対処できるように、ソウゴ達はここを集合地点に選んだ。

「ところで我が魔王。少し左に寄ってくれないか」

「え、急にどうしたの？ まあいいけど……」

突然妙な要求をしてきたウオズに困惑しつつ、ソウゴは橋の左側に移動する。次の瞬間、虚空に向けてウオズは自身が身に付けるマフラーを勢いよく伸ばした。マフラーが伸びる先にいたのは、不安定な足取りで歩くサラリーマン。

「何してるの!？」

「私の目を欺けると思ったなら大間違いだ。我が魔王、彼はアマゾンだ」

マフラーでサラリーマンを拘束し、空中に放り投げると、サラリーマンが低い唸り声と共にアマゾンに変身した。全身が黒い棘で構成されており、さながら人型のウニである。

ウニアマゾンは体を丸めて死の車輪となつて突撃してくるが、ウオズとソウゴは身を翻して避けた。

「ここは私が相手をしよう。我が魔王の手を煩わせるほどの相手でもない」

『ビヨンドライバー!』

『ウオズ!』

ウオズは懐から蛍光色の緑が特徴的なバックルと、ライドウオツチを取り出す。ライドウオツチはソウゴやゲイツが使うものとは全く異なる形状をしており、所謂『スマー トウオツチ』に近い。

バックルを腰に装着してベルトを展開。ライドウオツチのスイッチを押して起動させ、ベルトの右側に嵌め込む。

『アクシヨン!』

EDMを思わせる待機音声が流れ始め、ウオズの背後に逢魔降臨曆を思わせる立体映

像が投影された。

「変身」

『投影！ フューチャータイム！』

立体映像が水色の『ライダー』の四文字へと切り替わり、無数の光の線へと解ける。

『スゴイ！ ジダイ！ ミライ！ 仮面ライダーウオズ！ ウオズ！』

光がウオズの体に収縮し、銀と緑の二色が眩しい戦闘形態を形成した。

マッシュヴな体躯は機械的でシンプルながら、確かな力強さを秘めている。顔面でV字を形成するアンテナは、時計の針の如く左右の長さが異なる。そして目の部分には水色で『ライダー』の文字が刻まれていた。

それは別の未来から持ち込まれた異物。魔王オーマジオウが救世主によつて倒された世界からやつてきた、もう一人のウオズが使っていた『未来の力』。

現在それはこのウオズの手にある。奪ったモノであり、託されたモノ。

彼はこの力を使い、新たな未来を創出し、正しき歴史を記す。

かつては未来の創造者。そして今は――。

「祝え！ 過去と未来を読み解き、正しき歴史を記す預言者。その名も仮面ライダーウオズ！ 新たな歴史の1ページである！」

歴史の預言者、仮面ライダーウオズ。

魔王の忠臣として、彼は眼前の敵を打ち払うのだ。

『ジカンデスピア！ ヤリスギ！』

ベルトから出力されたは、タツチ変槍へんそうジカンデスピア。槍・杖・鎌ツエ、三種の変形機構を持つウオズの専用武器だ。

槍モードは取り回しに優れる。素早く振るって三回突くと、緑色の閃光が走った。

「うぐうッ……」

ウニアマゾンが呻く。すかさず斬り上げて空中に浮かせ、返す刀で袈裟斬りにして地面に叩きつけた。

「どうにも手応えが薄いな……」

ウオズは仮面の下で懐疑の表情を浮かべていた。

弱い。ハッキリ言って弱い。攻勢に出ていれば違ったかもしれないが、防御が弱いのだろうか。それにしても反撃のペースが控えめで、妙に弱々しい。

「誰か助けてくれ……」

助けを求める声。その主はウニアマゾンであった。

「何？」

「ひよつとして……意識がある？」

ウオズの後方に控えるソウゴが推論を述べた。このアマゾンは人間から変えられた

ものだ。とすれば、目の前のウニアマゾン人間としての意識を残す個体だったということになる。

「何か聞き出せるかもしれない！ ウオズ、あんまり痛めつけすぎないようにね！」

「了解した。多少骨が折れるが、やってみせよう」

『クイズ！』

『アクション！』

別のライドウオッチを、ビヨンドライダーに装填する。

この時代に存在しない、別の未来のライダーの力を宿すライドウオッチ。それは『ミライドウオッチ』と呼ばれる。

仮面ライダーウオズ、彼自身もまたこの時代には存在しないライダーであり、故に彼は自らと同じく未来の力を使うことができる。

彼が取り出したミライドウオッチは、2040年に活躍する仮面ライダーの力を持つ。

『投影！ フューチャータイム！ ファクション！ パクション！ クエストン！』

フューチャーリングクイズ！ クイズ！』

ウオズの上半身に、赤と青の装甲が追加される。赤い右肩の装甲には○、青い左肩の装甲にはバツの印が刻まれている。胸部分には二つ重なったクエスチョンマークの紋



章。額にも大きなクエスチョンマークが被さり、眼の部分には橙色で『クイズ』と刻まれた。

別の未来の2040年にて活躍するライダー、その名は仮面ライダークイズ。正解を答え、世界を救う、○×クイズの仮面ライダー。ウオズは彼の力を使い、正しき未来のために謎を掛ける。

ライダーの力を宿すが、アーマータイムに非ず。未来より顕れる力を行使する形態、人呼んで『フューチャーリング』。

その名も仮面ライダーウオズ・フューチャーリングクイズ。

『ジカンデスピアー！ ツエスギ！』

ジカンデスピアーを杖モードに変形させ、ウオズがゆつくりとウニアマゾンに歩み寄る。

「知性があるならこの問題に答えてみたまえ。問題！ 一般にウニとナマコは共に棘皮動物である。○か×か？」

大仰な身振り手振りから、スムーズにクイズを出題する。

「……ナマ、コ……？」

ウニアマゾンが頭を抱える。微睡む意識が首をもたげ、微かに残った人間的知性を発揮しようとしていた。しかし……。

「時間切れ。ちなみに正解は○だ」

正解を出す前に、ウニアマゾンが頭上から雷に打たれた。これがクイズの能力だ。自ら出題したクイズに不正解、あるいは無回答だった相手に、雷撃を浴びせる。非常にトリッキーだが、使いこなせば強力だ。使いこなせるなら、の話だが。

「では第2問。青いバラの花言葉には『不可能』が含まれる。○か×か？」

言うが早い、ウニアマゾンが駆ける。問題を答えずとも、先にウオズを倒せば良いと判断したようだ。ウオズはジカンデスピアを棒術の要領で振る、ウニアマゾンを打ち据える。

「回答権は行使して貰えないと困るな。盛り上がり欠ける」

「ぐうッ……ば、×……」

不正解。かつて『青い薔薇』という言葉は不可能の象徴としての意味を持っていた。ジカンデスピアの先端から発生した電撃が、縄となってウニアマゾンを縛り上げる。

「よろしい。では最終問題！ 私の攻撃は君に当たる。○か、×か！」

『ピヨンドザタイム！』

ウオズはジカンデスピアを空中に投げ上げると、ピヨンドライバーのレバーを引いた。

「あ……!? ば、×で頼む！」

ウオズが空中に飛び上がる。飛び蹴りの体勢に入ると、○と×を象ったパネルが、ウニアマゾンの背後に現れた。雷撃を纏って一直線、飛び蹴りがウニアマゾンに直撃……せずに、遙か後方の地面に突き刺さって爆発した。

「え……せ、正解……?」

「不正解だ!」

『クイズショックブレーク!』

ウニアマゾンの傍らにウオズがいた。ウオズは強烈な上段回し蹴りをウニアマゾンに浴びせ、○のパネルに叩き込んだ。○のパネル諸共、ウニアマゾンが派手に爆発した。

ウオズの手元にジカンデスピア・杖モードが戻ってくる。飛び蹴りを行ったもう一人のウオズは、ジカンデスピアが創り出した幻影だったのだ。

爆発光が消えると、ウニアマゾンだった人型は、スーツを着たサラリーマンに戻っていた。決着を確認し、ウオズは変身を解いた。

「大丈夫ですか!」

ソウゴとウオズがサラリーマンに駆け寄る。傷を負ってはいるが、重傷というほどではなく、ソウゴは安堵の表情を浮かべた。

「ぐ、またか……」

サラリーマンが譫言のように呟く。『また』とは、とウオズが尋ねた。

「5日くらい前に青い変なのと出くわして、さつきみたいなた姿になったんだよ。何が起こってるんだか分からんうちに、緑色のバケモンに倒されて……ソイツに血液検査を受けてくれって言われたから、次の日に会社休んで行ったんだけど、何も異常は無くてさ……」

「(水澤悠、か)……すまないが、所属を教えてくださいな。重要な情報だ」

「我蘭製薬ってトコだよ。前はそこの研究開発部門にいたんだけど、研究施設が焼けてから異動になってな……ってか君ら何者？ あんまりウチを詮索して回るのは、若い君達にはオススメできないけど……」

我蘭製薬。やはりアナザーアマゾンネオは、我蘭製薬の関係者を手当たり次第にアマゾンにして回っている。

しかし、同時に厄介なことが明らかになった。一度アマゾンになってしまった人間が、何度でもアマゾンに変身できてしまうということだ。

「ところで、青い変なのって言ってましたけど……今日は見ました？」

「いや、見てないな。ただ……なんか異様なくらい腹が減って、そこから意識がこう、朦朧として……」

「それで今に至る、と。我が魔王、かなり事態は深刻だ。我々が思っている以上に、アナザーアマゾンネオは強力な敵だったようだ」

「そうだね——待ってウオズ、アレ見て!!」

ソウゴが突然声を張り上げて、西の空を指差している。ウオズとサラリーマンがその方角に目を向けると、信じがたい光景が目に映る。

飛行可能な鳥類は、一对の大きな羽を筋肉によつて制御する。一般にハトの胸部は前面に突き出しているように見えるが、それは飛行するにあたつて形状的に都合が良いというだけでなく、胸の筋肉が非常に発達しているからでもある。

そういう意味では、宗教画などに描かれる人型の天使は、物理法則下の存在とは言い難いだろう。鳥の羽を持ちながら、人のカタチを保つて飛ぶというのは、幻想的と言わざるを得ないかもしれない。

しかし、今ソウゴ達が見ているのは、そんな『人型の天使』めいた空飛ぶ異形であった。

六枚の巨大な翼を羽ばたかせて、高層ビル群に向かって飛んでいく青い怪物。遠目ではあつたが、紛うことなくアナザーアマゾンネオである。

荒唐無稽を通り越し、驚きが平静を呼び起こす。あんなものを放置しておくわけにもいかなない。悠長に構えていれば、多くの犠牲が出るだろう。

ソウゴは『秘策』を実行するため、守衛礼二に電話をかけた。

『お掛けになった電話は、電波の届かない場所にいらっしやるか、電源が入っていないた

め、かかりません』

遅きに失した。一度アマゾンになってしまった者が、再びアマゾンになってしまうのなら、礼二もまた、恐らくは……。

「我が魔王！」

ウオズが背後にいたサラリーマンに蹴りを入れた。ソウゴは一瞬驚いたが、サラリーマンの目が虚ろになり、獣じみた唸り声を上げたのを察知して、拳を構える。サラリーマンは全身から蒸気を放出しながら、再びウニアマゾンと化した。

ウニアマゾンはソウゴ達には目もくれず、アナザーアマゾンネオが飛び去った方角へと走っていく。

「逃げられたか……」

「でも……ある意味チャンスだ、アナザーアマゾンネオを追う。ウオズも後で合流しよう」

「私に何を任せると？」

「街には人が大勢いるハズだ！ 一人でも多く避難させて！」

ソウゴはライドストライカーを展開して走り去る。アマゾンの特性はソウゴにとって未知数だ。いつアマゾン達が無差別に人を襲い始めるかも分からない。

「やはり、人使いの荒い魔王だ……」

『シノビー!』

ウオズが新たなミライドウオツチを取り出す。魔王からの命を果たすために、彼もまた独自に動き始めた。

B Part-2につづく。

## B Part—2

午前8時。

明光院ゲイツと水澤悠は、報道された記録映像……すなわち、アマゾンの目撃情報があつた場所を次々と周っていた。そこであれば、アマゾンの形跡や残滓を見つけられるかもしれない、と判断してのことであつた。

「何か分かるか？」

「……何も無い。痕跡も、ここにいたことを示す残滓も」

「何も分からんということが分かつた。それがあのアマゾン達の特徴でもある、ということだろう」

悠は特殊かつ強力なアマゾンだが、決して万能ではない。恐らくは溶原性細胞を基にしていると思われる今回のアマゾンの対処に関して言えば、完全に後手に回っていた。

調査中、ゲイツ達は一度もアマゾンに遭遇していない。夜間ではないから、というのもあるだろうが、アマゾンが人間を襲つた形跡も無いのだ。悠からすると明らかに異常であつた。

「人間を襲つたなら、人間の血肉を通してアマゾンを追えるかもしれない。でもその痕



跡すらないなんて……」

「アナザーアマゾンネオによって、行動を制御されているのかもしれない」

「そんなことが出来るの？」

「あくまで仮定だ。だが、アナザーライダーが本来のライダーとは違った性質を手に入れることはままある。お前の言う『オリジナル』に出来なかつたことが、アナザーライダーにも出来ないことである可能性は、あまり考えない方がいいだろう」

ゲイツは勤勉であつた。過去の戦闘や、ライドウオッチから得られる力などの知識を総合して、彼は『アナザーアマゾンネオは基となつたアマゾンネオとは異なる性質を持つ』という仮説を立てていた。



悠とゲイツはこの調査を経てそれなりの信頼関係を築いていた。互いの情報を共有し合う時間があつたのが大きな理由だ。ゲイツは事情を知つてからは特に悠を怪しまず、また悠もゲイツの能力を信頼している。

現在ゲイツと悠は、アマゾンの目撃情報があつた地点からほど近い公園で休憩していた。この近くには霊園があり、平日の昼でもあるために人気は少ない。

「アマゾンネオ、か……」

悠が呟く。彼は今回の事件に関わるまで『アマゾンネオ』という名前を知らなかつた

という。彼にとって『アマゾンネオ』とは、自分がかつて助けた赤ん坊であり、自ら命を奪った少年であった。

仮面ライダーアマゾンネオ。変身者は千翼ちひろという少年だったと悠は語る。人間とアマゾンの細胞が特定条件下で融合して生まれた溶原性アマゾン細胞、そのオリジナルたるアマゾンの一体であったが、悠は千翼の父親である鷹山仁たかやましんという男と共に、彼を殺すことになった。

千翼に関して、悠はゲイツに複雑な心境を語った。仁は全てのアマゾンに殺すと誓っていたが、だからといって自らの子を殺していいのか、と考えた末に、千翼と彼の母親の逃亡を手助けた。それが原因で、後に万単位の感染者を生むことになる溶原性細胞を世に放った挙句、結果的には自分で千翼を殺すことになったのだ。

生きるために、そして『守りたいものを守る』ために多くの命を殺してきた。悠の道程は艱難辛苦に満ちている。同族を喰らい、かつて人間であった男を殺して生き延びた。彼は己の過去を『そういうもの』として完全に割り切れてはいなかった。

「なるほどな……」

ゲイツは悠の事情を聞き、ある意味では自分と似ていると思った。

形はどうあれ、悠は千翼という少年の命を救った。だが、その結果として災厄が齎されるならば、倒してでも災厄を止めねばならない。

ゲイツは面識もない千翼という人物に、現在の常磐ソウゴを重ね合わせていた。王の器を持つ、最善の王を目指す若者を。

ソウゴとて最低最悪の魔王になる可能性はある。『させない』とゲイツは誓ったものの、魔王になる可能性が無くなったわけではない。もしもソウゴが最低最悪の魔王になったならば、自分は刃を握れるだろうか。

悠は既にゲイツから、この時代でのゲイツ達の身の上を聞いている。だからこそ、悠はゲイツに千翼の話をしたのではないかとゲイツは思った。

「ごめんね、少し暗い話になっちゃったかな」

「いや、構わん。千翼というヤツの話だが、俺も似たような立場ではあるからな」

悠が立ち上がり、ゲイツの方を向いた。悠の瞳は決然として、何かを訴えようとしている。声を低くして、悠が口を開く。

「ソウゴ君、だったね。2068年の未来で、最低最悪の魔王になってるっていうのは」  
「ああ。だがヤツは魔王になどならん……いや、俺達がさせせん」

「……もしも彼が、魔王になったとしたら、君は彼を——」

言い終えるより先に、ゲイツが身構える。ハンチング帽を目深に被り、青いジャケットを着た中年の男が、ゲイツ達の方に向かって歩いてきた。

何者か？ 視線はゲイツ達を向いており、ゲイツ自身はこの男と面識はない。ならば

考えうる可能性は……素顔を知らないということだ。つまりは——。

「お前がアナザーライダーか」

ゲイツがぶつきらばうに問いかける。男は無言で歩み寄り、アナザーライダーに変身するための、禍々しきライドウオッチを右手に挿んだ。

「もうすぐ時が満ちる……その時、邪魔をされたくはない」

「復讐のため、か」

ゲイツとて何も知らないわけではない。今回の相手が何者であるかは、もりえれいじ守衛礼二という男から、ソウゴを通して知らされていた。

こうさかだいすけ高坂大介。我蘭製薬の研究員。社の研究施設の火災によって息子を亡くし、挙句の果てにその事故自体を隠蔽され、我蘭への復讐を誓った男。

「……隠蔽によつて、失われた命が闇に葬られた悲しみと、誰もが口を噤まねばならないことへの怒りが、君に分かるとでも！」

「その怒りはごもつともだ」

『ゲイツ！』

ゲイツはジクウドライバーを着け、自分のライドウオッチを起動させる。

「だからとて、人間を人喰いの怪物に変えるようなマネを許すわけにもいかない。怒りが消えずとも、その復讐は俺達が断つ」

ジクウドライバー右側にライドウォッチを装填。左側には砂時計めいた形状の大型ライドウォッチを嵌め込んだ。

『ゲイツリバイブ！ 剛烈！』

「ここは俺一人でやろう。伏兵がいればそちらは任せる」

悠を後方に残して、ゲイツは大介と向かい合った。

一人では難しい相手だ。しかし、ゲイツは全てを出し切ったわけではない。以前には見せなかった力を、可能な限りヤツに叩き込む。

「止められると思うな……！」

『AMAZON NEO！』

大介がアナザーウォッチを起動させた。青黒い体色、機械と生物の中間めいた悍ましい姿。アナザーアマゾンネオが、怒りに体を震わせながら立っていた。

「ジオウが魔王になるならば、と聞いたな。俺の答えを見せてやる……変身！」

ジクウドライバーが回転し、ゲイツが戦闘形態へと変身した。

『リ・バ・イ・ブ！ 剛烈！ 剛烈！』

総身に力が漲り、四肢は屈強かつ硬質なものに置き換わる。仮面ライダーゲイツの姿が、悉く戦闘に特化したカタチへと一新されていく。

真つ先に目に付くのは、上半身を覆う橙色の装甲だ。鍛え上げられた筋肉を思わせる

それは、全身に凄まじい力を送り出し、あらゆる攻撃を防ぐ頑強な鎧と化す。

顔面には砂時計型のアラート機構と、より鋭角的なフォルムになった『らいだー』の四文字が現れる。赤色を全面に押し出した、超攻撃的戦闘形態が完成した。

仮面ライダーの歴史を画する審判の日にして、オーマジオウが誕生する日。即ち『オーマの日』を控えたゲイツは、オーマジオウに対抗しうる『救世主』として、ある男に見出された。

『この時代に存在しない3人の仮面ライダーの力を揃えた時、救世主が誕生する』と。

2022年、2040年、2121年。3つの未来で戦う3人の仮面ライダーの力を集め、ゲイツは真の救世主への階段を登った。

かつてはジオウを倒すために。そして今は、新たな未来を創るために。

巨悪を駆逐し、未来を導く救世主<sup>イル・サルバトーレ</sup>。

王の宿敵にして王の友。魔王を倒し平和を齎す未来の戦士にして、魔王と共に今を生きる第一の朋輩。

その名も仮面ライダーゲイツリバイブ。

二つの力と姿を以て、最強の闘士が降臨した。

ゲイツリバイブが静かに歩み寄る。右手に持つは裂風削烈<sup>れつふうさくれつ</sup>ジカンジャックロー・のこ

モード。怪力を誇る『剛烈』の力を最大限に活かせる、丸鋸を模した格闘兵装である。

アナザーアマゾンネオが全身から触腕を伸ばし、ゲイツの上半身に突き刺した……否、ゲイツは未だ無傷である。強靱たる装甲は、触腕の刺突を一切通さなかった。

ゲイツリバイブは腰を落として力を溜め、爆発めいた勢いで一気にアナザーアマゾンネオに殴りかかった。右手のジカンジャックローをアナザーアマゾンネオの顔面に叩き込み、左手で強引に引き戻してから、グリップ部分のスイッチを押しした。

『パワードの……のこ切斬！』

膨大なエネルギーが橙色の渦を巻く。ジカンジャックローの刃をアナザーアマゾンネオの胸に押し当て、捻りを加えて押し込む。エネルギーが解放され、アナザーアマゾンネオが後方に吹き飛んだ。

「ぐ、あうッ……」

凄まじい怪力と鉄壁の防御は、アナザーアマゾンネオを苦戦させるに足る水準に達していた。しかし、怪力と防御は同時にアナザーアマゾンネオ自身の得意とするところでもある。触腕を束ねて右腕に剣を生成する。熱を帯び、微細な振動を見せるこの剣ならば、ゲイツリバイブの装甲を貫くに不足は無い。

両者が構えた、先に動くはゲイツリバイブ。鋸の刃が、居合めいて振り抜かれた剣とぶつかり、激しく火花を散らした。振動する刃と回転する刃が、互いに喰らい合う。

「まだまだ……喰らえッ！」

「ぐあつ!？」

鏢迫り合いを右腕の力で強引に切り上げ、アナザーアマゾンネオの左腕が風を切る。アナザーアマゾンネオの左腕側面部には、ピラニアのヒレを思わせる生体の刃が備わっていた。アツパーカットの要領でゲイツの顎に拳を叩き込み、腕の刃が胸部装甲を諸共に切り裂いてゲイツにダメージを与えた。

続いて全身から伸びた触腕が、無数の針となつてゲイツリバイブに突き刺さる。

「ゲイツ君!」

後方に控えていた悠が叫んだ。至近より現れた針山が、装甲を貫いてゲイツを串刺しにしてしまった。

そのはず、だったのだが。

「何が、起こっている……?」

既に触腕はアナザーアマゾンネオの体内に収められている。だというのにゲイツは空中に静止したまま動かない。異様な光景に、アナザーアマゾンネオは首を傾げた。

次の瞬間、アナザーアマゾンネオの全身を青い突風が撫ぜた。強烈な勢いで吹き抜ける風は、無数の斬撃を纏いながらアナザーアマゾンネオを斬り裂いた。

「ぬうーッ!？」

アナザーアマゾンネオが空中に飛んだ。自らの意思ではなく、先の突風によるもので



ある。その瞬間、アナザーアマゾンネオの視界に青いゲイツリバイブが映った。

『スピードタイム！ リバイ・リバイ・リバイ！ リバイ・リバイ・リバイ！ リバイブ・疾風！』  
しゅぷう

青いゲイツリバイブが、アナザーアマゾンネオを見据えて次の一手を繰り出さんとしていた。静止した一瞬、遅れを取り戻すようにジクウドライバーが唄う。

ゲイツリバイブ剛烈は、赤く頑強な装甲を防御力と攻撃力の増強に用いていた。しかし今のゲイツリバイブは、青い装甲を翼のように開いて、目にも留まらぬ速さで動いていたのだ。

構造は単純である。ゲイツリバイブ剛烈の上半身を覆っていた赤い装甲、その裏側には速度増強及び飛行の機能を備えた青い装甲が存在していた。

空中のゲイツはあまりにも速すぎる青いゲイツリバイブの動きによって生じた『数秒過去の残像』に過ぎない。

この形態の名は、ゲイツリバイブ疾風。

悪を払う青き疾風を纏い、救世主の反撃が始まる。

「お前が相手ならば、やはりこちらの方が相性は良いな」

ゲイツが呟く。一瞬の後に放たれた触腕は、弾丸めいた速度で迫りながらもゲイツに届くことはない。ジカンジャックローを二つの刃が付いた鉤爪に変形させ、音速を超え

て縦横無尽に斬りつける。ジカンジャックロー・つめモード、ゲイツリバイブ疾風専用の形態だ。

アナザーアマゾンネオの視界には、ゲイツの輪郭は明瞭に映らない。色の付いた風が吹くだけであり、反応不可能な速度で斬撃が襲いかかってくる。反撃の余地など存在しない。

『スビードクロー！ つめ連斬<sup>れんざん</sup>！』

ゲイツが更に加速する。高速のスライディングでアナザーアマゾンネオを空中に打ち上げ、無防備になった全身を連続で斬り抜けた。トドメの一撃で撃ち落とし、アナザーアマゾンネオは地面にしたたかに打ち付けられた。よろめきながらアナザーアマゾンネオはなおも立ち上がる。自らの復讐にかける執念か、あるいはアナザーライダーとしての身体能力か。

「ぐうッ……ここで終われるものか……我蘭への復讐を、果たすのだ！ 俺は……俺はアア！」

アナザーアマゾンネオの傷が少しずつ塞がっていく。それと同時に金属製の胸部プロテクターに亀裂が入り、露出した青黒い体が不規則に蠢き始めた。体内で触腕が暴れ回っている。

ゲイツと悠は、アナザーアマゾンネオに起ころうとしている何らかの変容を肌で感じ

取った。空気が強張り、極限の緊張状態が生まれる。

ゲイツはアナザーアマゾンネオの胸部が、不規則に脈打っているのを見た。無機質な鎧が罅割れ、今にも弾け飛ばうとする一瞬、ゲイツは後方の悠に向かって叫ぶ。

「伏せろ！」

次の瞬間。

熱と光が、公園を灼き尽くした。



何が起こったのか。

地面に伏せていた……否、地面に叩きつけられた水澤悠の視界にはハッキリと映っていた。

膨大な熱量と、激しい光。アナザーアマゾンネオの全身が爆発したのである。

鉄鎖が半ばで千切れたブランコ。顔の右半分が消し飛んだ、デフォルメされたゾウの木馬。炭化した木製のシーソー。音を立てて崩れ落ちる、大人でも乗ることができた大きな滑り台。

名も知らぬ公園が、一瞬にしてその形を失った。

ゲイツリバイブは既に変身を解かれている。爆心地の近くにいたが故に、ゲイツは爆風の直撃を喰らってしまったのだ。

現在悠が見ているのは空中だ。これらの破壊を引き起こしたアナザーアマゾンネオは、更なる異形となって空中に浮かんでいる。

アナザーアマゾンネオが飛んでいる。左右三対の青黒い翼を背中から生やし、空中から地上を睥睨している。金属製の仮面が砕け散り、真紅の双眸が露わになった。プロテクターが脱落し、ヤマアラシめいた刺々しい肉体を隠すものは何一つ無くなった。シルエツトだけならば、ギリシャ彫刻の英雄像にすら匹敵するマツシヴなものとなっており、ある種の神々しさすら感じさせる。

もはや獣を縛るものは何も無い。枷は壊され、何者も彼を制御することは出来なくなった。

空高く舞い上がり、アナザーアマゾンネオは都心部へと向かっていく。軍用ヘリコプターに匹敵する速度で、青黒い獣は遙か彼方へと飛び去った。

一瞬の出来事である。ゲイツと悠は呆然とするしかなかった。現状を認識し、ゲイツが切り出す。

「……調査結果の通りなら、あの方角には我蘭製薬の施設がある！ しかも本社ビルが近い！」

「見て、ゲイツ君！」

悠が指差したのは近くの民家の屋根だ。動物的異形の集団が、屋根から屋根へと飛び

渡る。50体を超えるアマゾンが、アナザーアマゾンネオと同じ方角へ向かっている。

「あれだけのアマゾンを既に仕込んでいたのか……！ 俺達も行くぞ！ これ以上アナザーアマゾンネオを放っておけば、取り返しのない被害が大量に出る！」

アマゾンは人喰いの怪物である。それが街に放たれば、白昼堂々と惨劇が繰り広げられることとなる。仮に制御しているのがアナザーアマゾンネオであるならば、一刻も早く彼を倒さねばならない。

ゲイツと悠はバイクに乗って、アナザーアマゾンネオを追う。

残された時間は少ない。今度こそ決着をつけねばならない。

最悪の事態を頭に思い描きながら、二人は高層ビル群へと歩を進める。

B | Part-3につづく。

## B Part—3

獸は感傷を抱かない。しかし彼はかつてはただの人間であつた。世の理から外れた力など持たない、ごく普通の社会人であつた彼は、心中にて呟く。

『空を飛ぶとは、このようか心地であつたのか』と。

……だが、重要なのはそこではない。彼には為すべきことがあつた。己がかつて属していた我蘭製薬の本社を襲撃する。そのために無数の因子をバラ撒いた。

我蘭製薬は非常に規模の大きな企業であるが故に、社員も数多く存在する。業務内容も様々であり、秘密主義の傾向が強いためか一部の業務を外部に委託するようなことはあまりしていない。製品を運ぶトラックに至るまで、自社で購入してドライバーを育成しているのだ。

ゆえに、『我蘭製薬の社員』と条件付けをしても、この街にはかなりの数がある。廃業した運送会社から引き抜かれたドライバー、新薬の研究を進める研究員、地方に売り込みに行く営業マンに至るまで、出来る限りの人間を人喰いの怪物に変じさせ、またある者は因子のみを埋め込んだ。いわば『アマゾンの因子』とも言うべきソレが発動する条

件はいくつかあるが、究極的にはアナザーアマゾンネオの意思のみで制御できる。そして、アナザーアマゾンネオはその段階に到達してしまっていた。

かつて『我蘭製薬の研究者・高坂大介』であった男は、殺戮と残虐を撒き散らす無慈悲なる怨念の獣に成り果てたのである。

アナザーアマゾンネオは強化された触覚にて微細な気流の変化を感じた。飛翔する何かが、高熱を纏ってこちらに向かつてきている。飛行速度は、軍用機を超える速度で飛ぶアナザーアマゾンネオよりも速い。何者だ、と考える暇もなく飛翔体はアナザーアマゾンネオに激突した。付近のビル屋上に、二つの物体が不時着する。

「ぐうッ……誰だ！ いや、お前は……！」

「アンタを止めに来た。これ以上先には進ませない」

激突した飛翔体、その正体は仮面ライダージオウ。白いロケットめいた奇抜な鎧に身を包み、顔面には『フォーゼ』の文字。

仮面ライダージオウ・フォーゼアーマー。絆の力でその手に宇宙を掴む仮面ライダーの力である。

「お前も知っているのか、『私』を！」

「礼二さんから聞かせてもらったよ。我蘭製薬を恨んでることも、事故のことも含めて」我蘭製薬の火災事故。死傷者に関する情報の隠蔽。少なくとも褒められた所業では

あるまい。そのことはジオウ……常磐ソウゴとて重々承知である。

「……ならば、そこを退いてくれ。理解できないものでもなからう」

「アンタが我蘭つて会社を恨んでることも、その理由も分かった。だけど、それを理由に俺が退がることはできない」

「何故だ！」

激しく全身を震わせるアナザーアマゾンネオに対して、ジオウは冷静そのものである。その場から微動だにせず、青年は語る。

「俺、王様になりたいんだ。王様になって、世界をより良くしたい。悲しみを背負う人を減らしたいし、楽しい時がもつと楽しくなれば良いとも思う。だからさ、アンタのことも放つておけない」

「……は？」

何を言っているのだ、この男は。仮面の下で大介は唾然とした。

悲しみを減らしたい。ならば自分の中にあるこの感情は何だ？ 何のために今までがあつたのだ？ この怒り、恨みは……やはり晴らさねばならない。悲しみを減らすというのなら、今ある憎しみを払ってみせると、大介はソウゴに激情を叩きつける。

咆哮が轟くが、ジオウは一步も退かない。両手を広げて飛び上がり、ジクウドライバーを回転させる。



『フィニッシュタイム！ フォーゼ！ リミット！ タイムブ레이크！』

「ロケットきりもみキック！」

全身を一機のロケットに変形させ、高速回転によって増した力を含めて全霊の錐揉みドロップキックを叩き込む。この場では倒せずともダメージにはなる。

激突は一瞬、アナザーアマゾンネオはキックの直撃を受けてビルから落ちるかに思われた。

ジオウの全身が空中に浮かんだまま静止した。激しい回転運動は、写真に切り取られたようにわずかな一瞬を捉えられ、微動だにしない。

アナザーアマゾンネオの後方に、一人の男が立っている。タイムジャッカー・スウォルツ。彼が用いた強力な時間停止により、アナザーアマゾンネオとスウォルツ以外の全てが動きを止めていた。

「またお前か……」

「助けてやったのだ、感謝してもらいたいものだが……まあいい。空を見てみる」

スウォルツが西の方を指差す。時間停止の中にあつて、未だ動きを止めていないのは彼らだけではなかった。

巨大な穴が上空に開いている。この穴は、異なる時空に繋がる門である。スウォルツはそう考えていた。

かつてギンガという未知の仮面ライダーが、異なる時空より飛来して地球を襲撃した事件があった。ギンガの力は最終的に常磐ソウゴ達の手に渡ったものの、スウォルツとしては一つの収穫となった。

スウォルツは異なる時空への門を開くための実験として、アマゾンネオの力を時空の歪みより手繰り寄せたのである。自ら時空の歪みを制御したという前例が無い、という意味では分の悪い賭けであったが、結果的にスウォルツはアナザーアマゾンネオのウオツチを手に入れることができた。

アナザーアマゾンネオのウオツチを高坂大介に渡してから、徐々に時空の歪みが大きくなり始めた。食人の怪物たるアマゾンの力は、この世界とは微妙に異なる歴史に伝えられた異聞に由来する。

異分子が持ち込まれた影響から、時空の歪みが一時的に強まった。そうして生まれたのが、虚空に開かれし時空の門であった。

「よくぞそこまで鍛え上げた。あと一押し……俺からの前祝いだ」

スウォルツが空の穴に手を伸ばし、何かを引きずり出すような動作を行う。スウォルツの右手に禍々しい青紫の光を放つ球状のエネルギーが握られると、それをアナザーアマゾンネオの胸に押し込んだ。無形となった力が、アナザーアマゾンネオの全身を巡り満たす。

より強烈な力の高まりを、大介は感じていた。これならば復讐を果たすに不足無し、と確信して彼は再び翼を広げて空に舞い上がる。

目指す先は我蘭製薬本社。



アナザーアマゾンネオが飛び立ってから、スウォルツは時間停止を解除した。あとに残されたのは、スウォルツとジオウの二人だけである。

「また会ったな、常磐ソウゴ」

「スウォルツ……!」

ジオウが睨みつける。この男が元凶であるにしても、これ以上邪魔をされれば状況は最悪の展開を迎える。一刻も早くこの場を離れなければならぬ。

「邪魔をするな、というのはいかに同じであるようだが……まあいい。空の穴が見えるな? アレを閉ざしたいのなら、アナザーアマゾンネオを倒すといい」

「何だつて?」

スウォルツからの意外な助言に、ジオウが瞠目する。罠の可能性を疑ってみるが、だとすれば随分と素っ気ない言い方である。

ジオウは空の穴を見遣った。底無しし闇が空に広がっていく様は何とも不気味だ。

「俺としては空の穴……時空の門が閉じようが完全に開こうが一向に構わん」

「アンタが開いたんじゃないのか」

「確かにそうだ、だが一つ言っておく。時空の門を開くための保険ならある」

スウォルツがそう言った瞬間、地面が鳴動する。いや、地面ではない。ここは高層ビルの屋上だ。ビル自体に何らかの衝撃が走っている。

「さあ行け。でなければ……いよいよ取り返しのつかない事態になるぞ?」

何事かは不明だ、だがアナザーアマゾンネオを追わねばならないのも事実。ジオウは両腕に装着したロケット型のモジュールから炎を噴いて飛翔する。見送ったスウォルツが、一人眩く。

「さて……新たな門が開くぞ」

時刻は、正午を回ろうとしていた。

C  
Part-1

午後0時。

仮面ライダージオウ・常磐ソウゴ。彼には我蘭製菓への復讐を目論む高坂大介が変身したアナザーライダー、アナザーアマゾンネオを追い、これを倒すという使命があった。アナザーアマゾンネオが向かったのは、我蘭製菓の本社ビル。いよいよ復讐に終わりが訪れようとしていた。

ジオウは高層ビル群を抜けて、広大な十字路に到着した。仮面ライダーフォーゼの力によつて空を飛びながら、街を見渡す。

街には無数の異形が集まっていた。アマゾンと呼ばれる人喰いの怪物達。彼らの正体は、アナザーアマゾンネオによつてアマゾンにされてしまった人間達だ。100体を超えるアマゾンが、十字路を彷徨い歩いている。格子に入れられた猛獣めいた、爆発寸前の獣性。この全てが人喰いに向けられれば、その後は言わずもがなだ。

ジオウはフォーゼの鎧を外し、静かに着地した。動物園の動物と同じ檻の中に入れられたようで、ひどく不気味だとソウゴは直感する。アマゾン達はジオウに見向きもせ

ず、所在なさげに歩き回っていた。

辺りを見回していると、突如上空に青黒い影が浮かぶ。中天の陽光を背に受けて、皆既日食めいた情景を作り出した者がいた。六枚の翼に筋肉質で刺々しい体軀。見紛う筈もなく、アナザーアマゾンネオであった。充溢する力が、肉体の収縮と膨張を繰り返させている。

アマゾン達は諸手を上げて迎え入れる。さながら王の凱旋であった。人として生きていた彼らは、アナザーアマゾンネオという百獣の王に服従する、無数の獣アマゾンとなった。

アナザーアマゾンネオが、翼を限界まで広げて全身を包み込ませる。翼は繭と化し、路上に無数の触腕が突き刺さった。瞬く間に触腕が束ねられて木の幹めいた柱を形成し、青い大樹となってアナザーアマゾンネオを取り込んだ。柱から枝分かれた無数の触腕は周辺のビルに向かい、窓を割って侵入すると、何かを探すように縦横無尽に突き進む。ビル全体が暗転し、中にいた人間達は触腕の刺突を逃れることなく無残にも串刺しとなった。

暴走する生態の樹が、瞬く間に都市の機能を破壊し、蹂躪し尽くした。

人間達の街は一瞬にして、肉食獣ゾーン、オフアマゾンズの生息域へと成り果てた。

獣の大樹の頂点から、青い繭が顔を出す。縦に裂ける繭の中から、アナザーアマゾンネオが現れた。冒流的大樹と、獣の肉からなる繭こそが彼の玉座であるかのように、ア

ナザーアマゾンネオは凜として立ち上がる。

アナザーアマゾンネオが腕を前方に振り下ろすと、アマゾン達が一斉に一方方向へと進み始めた。王の号令が如く、獣達は十字路を疾走する。当然目指す先は我蘭製菓本社だ。未だジオウは単騎、しかし今こそアマゾン達を止めねばならぬ。

ジオウは少し大きなライドウォッチを取り出してこれを起動した。

『ジオウ！ Ⅱ！』

通常のジオウを思わせる白いウォッチと、異なる面相を見せる黒と金のウォッチに分割し、ジクウドライバーの左右に装填する。

『ジオウ！』

二つの時計が、ソウゴの背後に並ぶ。見通すのは過去と未来、最低最悪たる闇と、最高最善たる光の心。相反する二つを許容し、共に呑み込んで現在を戦う力が、ジオウを新たな階梯へと進める。

ジクウドライバーと共に、世界が廻った。

『ライダータイム!! 仮面ライダー! ライダー! ジオウ・ジオウ・ジオウ! Ⅱ!』  
アマゾンの群れを割って、ジオウが新たな姿へと変身する。姿形はジオウの面影を残しつつも、細部は全く異なるものへと変貌を遂げた。

ジオウの胸を縦に走る時計のベルト型パーツと、ジオウの顔面から伸びる時計の長短

針が『二つ』に増えている。新たに肩部装甲が追加され、銀とマゼンタに加えて金色を含めた三色が、鮮やか且つ荘厳に全身を彩る。

両手に持つは二振りの剣、右手にはかつてと同じくジカンギレードを持つ。

左手に現れるは時冠王剣サイキョーギレード。時計の針を模した造形と、通常時のジオウの頭部をそのまま据え付けたようなパーツが目を引く両刃の剣。ジオウが王として新たな歴史を開く瞬間に現れ、常にジオウと共に最強であり続ける王剣だ。

全ライダーを凌駕し、時空を超え過去と未来をしろしめす時の王者。

己の闇と光を認め、新たな歴史の幕を開く若き霸王。

その名も仮面ライダージオウII。

まさに出陣の刻である。

万軍を相手取るに不足無し、とばかりに悠然と歩むジオウII。その様を挑発と見たか、アマゾン達は方向を変えてジオウIIに殺到した。

『ジカンギレード！ ジュウ！』

ジオウはジカンギレードを銃モードに変形させ、牽制に弾丸をばら撒く。怯んだ隙に距離を詰め、一人一人順番に斬りつけていった。

ゾウめいたアマゾンの脇腹にサイキョーギレードを突き刺し、硬質な顎にジカンギレードの銃口を押し付けて撃ち抜く。次いで背後から襲ってきたウニアマゾンの突撃



を剣へと戻したジカンギレードで弾き、ゾウアマゾンからサイキョーギレードを引き抜いて跳び離れた。ジカンギレードを下に、サイキョーギレードを水平に置く攻撃的な構えのまま、己を円く囲むアマゾン達を見据える。

ソウゴは仮面の下で瞑目し、次の瞬間に何事か閃いたように目を見開いた。

……バラを思わせるアマゾンが斬りかかり、自らが弾いた瞬間に背後からヒョウのアマゾンが両腕の爪を繰り出す。これも防ぐとクワガタとカマキリのアマゾンが二方向から迫る。波状同時攻撃を防ぐ術はなく、あわやジオウの胴体は泣き別れ——れ別き泣は体胴のウオジやわあ、くなは術々防を撃攻時同状波——視界が巻き戻る。

「見えたー」

バラを思わせるアマゾンは、ハサミ状の右手を突き入れてきた。ジオウIIは勢いよく飛び上がり、右手を踏み台にしてバラアマゾンの背後に回り込むと、力を込めてサイキョーギレードを投げつける。バラアマゾンを貫いて、サイキョーギレードは直線軌道上に立っていたヒョウのアマゾンに突き刺さった。クワガタとカマキリのアマゾンはこちらから攻める。ジカンギレードを空中に投げ上げると、クワガタアマゾンに素早く拳の連打を浴びせた。背後から迫るカマキリアマゾンをギリギリまで引きつけてから必殺の一撃……否、二撃を叩き込む。

『トウワイズ！ タイムブレーク！』

クワガタアマゾンに強烈な右ストレートを入れ、次に飛びかかるカマキリアマゾンの両腕に自身の上段後ろ回し蹴りを合わせた。腕が砕けたカマキリアマゾンは戦闘能力を喪失して逃げ去った。このタイミングでジカンギレードがジオウの目の前に突き刺さり、少し手間取りつつも勢いよく引き抜く。ヒョウアマゾンに突き刺さったサイキョーギレードも、爆発と共にジオウIIの手に戻った。

一人一人は決して強力ではない。ソウゴはアマゾン達の強さについて、ある程度理解を深め始めていた。確かに、元々は戦闘経験もなければ戦闘意欲にも欠ける一般人だったのだとすれば、与えられた力を完全に扱いこなすのは不可能に近いだろう。まして、暴力的な衝動を強制して引き出されたのだとすれば、どこかでズレが生じる。仮面ライダージオウとして幾多の激闘を経たソウゴにとつては、いくら力が強くとも苦戦する相手ではない。隙を突けば倒せる上に、今のジオウにはそれを為しうる強力なアドバンテージがあった。

ジオウIIが可能とするのは『未来予知』である。元々はソウゴ自身が無意識に『予知夢』として発動していたこの力は、ジオウIIへの進化を経て強力な時空干渉能力という側面を露わにした。この力によって、ジオウIIは敵の動きを完璧に読み抜き、予知に現れた不吉な未来をも打ち破る。

未来をも支配するその力こそは、時の王者オーマジオウの片鱗に他ならない。故にソ

ウゴは自ら手綱を握り、己の王道を歩むのだ。最低最悪の未来を防ぐために。

二刀を以て敵を斬り伏せ、爆炎の中から歩いてくる様は、かつては普通の高校生であつたとは思えぬほどに威厳に溢れていた。徐々に獣達の動きが鈍り始める。目の前に一人立つ騎士の王に対して、本能的な畏怖を覚え始めていたのだ。手応えを感じつつ、ジオウが獣の群れへと一歩ずつ歩みを進めていた、その時であつた。

右足に重みを感じ、ジオウの歩みが止まる。下を向くと先程倒したはずのヒョウアマゾンが、上半身だけの状態で自分の足を引つ張つていた。消えた下半身が、断面から暗黒を噴き出して再生する。

何が起こつた、と思考する一瞬のうちに、アマゾン達が殺到する。技巧もへつたくれもない単純な力押しで、ジオウIIを押し潰そうとしている。満員電車めいた圧力、このままではジオウIIの全身は押し碎けるだろう。

獣の重圧で潰れかける中、ソウゴは空を見上げて瞠目した。余裕ではなく、態勢的に上以外が見えないからである。空に無数の闇が開き、アマゾン達が降つてくる。別の時空へと繋がる門が、無数に開いているのだ。ということ、あのアマゾンはアナザーアマゾンネオが生み出したものではない。恐らくは水澤悠みずさわはるかが知っている、本物のアマゾン達だとソウゴは直感した。

混沌極まる光景に、ソウゴは漠然と、しかしながら確信的に危機感を覚えた。だが身

動きのとれない状況では手の打ちようがない。半ば諦め、意識を手放しかけた——次の瞬間、炎が疾った。

「忍法・火遁の術！」

東の空から飛来する火柱が、アマゾンの集団を舐めるように焼き払う。獣達は火を恐れて、一斉に蜘蛛の子を散らした。圧力より解放されてよろめくジオウⅡの肩を、新たに現れた何者かが支える。

紫色の追加装甲に『シノビ』の三文字を刻んだ仮面。もう一つの未来、2022年の仮面ライダー……仮面ライダーシノビの力を宿した、仮面ライダーウオズが立っていた。

仮面ライダーウオズ・フューチャーリングシノビ。影となりて力なき者を守る、未来の忍者の力である。

「少し遅れたようだ、すまない我が魔王」

「……ちよつと遅かったかな？」

「人々の避難に手間取ってね。安心したまえ、この付近の人間達は全員、私の分身が成り代わった。破壊されたビルの中には、私の変わり身しかないということは保証しよう」

凄まじい規模の力を使ったことを、臆することなく言つてのける。この活躍に、ソウ

ゴは安堵のこもった笑みを浮かべた。

「さて、ゲイツ君達も来たようだ。反撃開始といこう」

散らばったアマゾン達を撥ね飛ばしながら、二台のバイクが走ってきた。明光院みょうこういんゲ

イツと水澤悠の二人が、ソウゴ達に合流する。

「ジオウ！ どういう状況だコレは!?!」

「後で話すよ。とにかく今は……アイツを倒す」

「あれが、今回の敵……アナザーアマゾンネオか」

集った四人が見上げるは、触腕を束ねて造られた大樹と、その頂に座するアナザーアマゾンネオ。天より見下ろすその姿は、王の威厳すら感じさせる。その瞳にはもはや怒りと憎しみ以外何も宿ってはいない。

だが、こちらには百戦錬磨の戦士達が集ったのだ。いくら相手が強大だろうと、負ける道理があるはずもない。

「これなら……いける気がする!」

「ああ、今度こそ決着だ。終わらせに行くぞ」

『ゲイツ!』

『ゲイツリバイブ! 疾風!』

「変……身!」

ゲイツがジクウドライバーを巻き、二つのウオッチを装填する。全身に力を溜めて、ジクウドライバーを回転させた。

『リバイ・リバイ・リバイ！ リバイ・リバイ・リバイ！ リバイブ・疾風！ 疾風！』  
ゲイツリバイブ疾風、青き救世主が再び降臨する。ゲイツと並ぶ悠も、重苦しい起動音と共にベルトを巻いた。

悠は密かに思いを巡らせる。守るべきもの、守りたいものを守るために戦った己の半生。正しくはなかったとしても、生きることを選んだ道だけは間違ひではなく、故にこそ……短い間ではあるが、共に戦う新たな仲間が在ったことに、喜びを感じてもいた。

悠はゲイツ達を、好ましく思う。自分が選んだ道とは異なる、苦しみに満ちていながら輝かしく煌めく未来の可能性を、ゲイツから聞かされた。食うか食われるか、それ以外の道もあるという可能性は、残酷な真実であると同時に一つの希望であった。自分が決して交わらない道だとしても、守るために戦ってみたい、と彼は思い始めた。

だから戦える。自分が守りたいのは、自分が生きる世界と、そこに生きる大切なモノだと、力を以て証明する。それが自分の従う『僕の声』——命の衝動だ。

一瞬にして全身が熱くなった。血が滾り、全身の骨肉に熱が伝わる。自分の中の自分が、目覚める。鉄甲の檻が破られて、獐猛な獣が噛み出す。魂を委ねるではなく、冷静に押し留め……ベルトの左グリップを強く捻る。

『OMEGA』

ベルトの名はアマゾンズドライバー。強力なアマゾンである悠の力を強く引き出し、制御する装置だ。悠はこれより、人外の怪物を曝け出す。

低く、強く、その名を叫ぶ。

「アマゾンツ!!」

『EVOL—EVO—EVOLUTION!』

緑色の爆炎が、悠の体から発せられた。

進化を謳うその名は『オメガ』。全身を包む緑・橙・黒の三色は、彼の内に眠る細胞を活性化させて形成したものだ。水澤悠は、人の遺伝子を持つ新たなアマゾンとしての姿……仮面ライダーアマゾンオメガと成った。

腰を落とし、両腕を前に向けた構えを取る。爆発寸前の獣性を隠して、全身が震えていた。

ここに役者は揃い踏み。

常磐ソウゴ／仮面ライダージオウ。

明光院ゲイツ／仮面ライダーゲイツ。

ウオズ／仮面ライダーウオズ。

水澤悠／仮面ライダーアマゾンオメガ。

歴戦の強者達は各々の武器を構え、静止する。彼らを動かすものは一つ、若き魔王の号令に他ならない。

「よし……全員揃ったね。じゃあ行こうか！」

魔王が高らかに宣言し、四人の戦士が駆け出した。

C | P a r t   2 へ つ づ く。



C  
Part—2

アナザーアマゾンネオは、天へと伸びる肉の大樹に座しながら、惨憺たる地上を眺めていた。己の心から、感傷が消えていく。感情は単純化され、怒りと憎しみだけが、彼の心を満たしつつあった。

半ば力に呑み込まれながらも、アナザーアマゾンネオの変身者である高坂大介は決して、怒りの根源を忘れなかった。許すまじ我蘭製薬、その思いだけは残り続けた。

しかし、なぜだろう。

戦端が開かれ、混沌を極める地上の中に、ただぼんやりと歩き続ける一体のアマゾンを見つけた。ハゲタカのアマゾン、かつて自分が作り出した一体。あれは誰をアマゾンにしたのだったか。記憶が曖昧になりながらも、引つ掛かるものを覚えていた。



ジオウⅡ、ゲイツリバイブ疾風、ウオズ・フューチャーリンググシノビ、アマゾンオメガ。四人のライダーが散開し、無数のアマゾン達と戦い始めた。

誰よりも先んじて動いたのはウオズである。巨大なエネルギーの手裏剣を形成して

前方の敵を吹き飛ばし、縦横無尽に戦場を駆け抜ける。破壊されたビル群を跳び渡り、印を片手で結びながら『仕込み』に入った。掌から紫色に光る炎の呪符を生み出し、これを適当な場所に貼り付けていく。

シノビの力とは、自然界に存在する五行……木火土金水の元素を糧として多種多様の忍術を扱うもの。ウオズもまたこの原則に従いながら、分身や変わり身の術を行使するわけである。

此度の避難には相当数の分身を動員した人海戦術で挑んだため、ウオズとて疲弊はしていた。今から使用する術は、使った力を取り戻すためのものだ。

疾駆するウオズの身体が、幾重にも連なる。各地から分身を呼び戻し、その身体に力として再び宿った。同時に『仕込み』も終わり、全ての準備は整った。高速で印を組み、獣の大樹に両手を突き入れる。

「忍法・五行大結界の術！」

大樹を中心に紫色の炎が奔る。炎の呪符へと突き刺さったいくつもの炎が、呪符と呪符を繋いで戦場となった十字路を円く囲んだ。

ウオズの周辺に無数の丸太が飛来すると、それらが朽ち果ててウオズに吸収される。『へのへのもへじ』の貼り紙は、この丸太がウオズが使用した変わり身の術に使ったものであることを示していた。

ウオズの全身に力が満ちていく。獣の大樹、周囲の大气、空気中に散らばる僅かな金属元素。森羅万象の欠片達を自らと一体化させて、己の力を取り戻す。更にアナザーマゾンネオが作り出した触腕の束からも力を吸い取り、弱体化を図る。結界は徐々に広がりながら、戦場と化した街を包んでいった。

「来る者拒まず、されど去る者は逃がさない。その力、削らせてもらおう」

名付けて五行大結界。即興でこなしした割には高い効果を得られたが、本番はここからである。ウオズは二体の分身を新たに作り出し、背中を合わせて構えた……と思いきや、分身達にミライドウオツチを手渡した。

「では本番といこう。頼むよ、私達」

分身達が無言で承諾し、クイズミライドウオツチと金色のミライドウオツチを起動した。

『クイズ！』

『キカイ！』

『アクション！ 投影！ フューチャータイム！』

ほぼ同時にビョンドライバーが動き、未来の力が現界する。

『ファッション！ パッション！ クエスション！ フューチャーリングクイズ！ クイズ！』

『デカイ！ ハカイ！ ゴーカイ！ フューチャーリングキカイ！ キカイ！』

二体の分身は、二人の未来ライダーの力を宿す。

一方は仮面ライダークイズ、2040年の仮面ライダー。

もう一方が変身したのは、金色の追加装甲にスパナめいた触角と『キカイ』の三文字を嵌め込んだ仮面。強壯たる機械の鎧が熱気を噴出する。

2121年、魔王の君臨するよりも遙かな未来にて、人類を脅かす機械の軍団と戦う仮面ライダーがいる。その名はキカイ。鋼のボディに熱いハートを宿す、優しき機械の仮面ライダー。

キカイの力を宿す者こそは、仮面ライダーウオズ・フューチャーリングキカイ。機甲の鎧に冷徹を宿し、目標の撃滅を開始する。

「未来は我らの手の中に……刮目せよ！ 我が名は仮面ライダーウオズ、正しき歴史の預言者である！」

高らかに声を上げ、三騎のウオズが戦闘を再開する。



『ライダー！ ライダー斬り！』

『ゼロタイム！ ギリギリ斬り！』

仲間が増えたとして、ジオウの為すべきことに変わりなし。周囲に次々と現れるアマゾ

ン達を、二振りの剣にて斬り払う。

アナザーアマゾンネオの進化によるものか、アマゾン達に厄介な性質が追加されたらしい。別の時空へと門が開き、アマゾンが溢れ出てくる上に、アナザーアマゾンネオが作り出したものには異様な再生能力まで加わった。斬っても斬ってもキリがなく、ジオウIIの力が強力無比であろうとも厳しい戦いであることに違いはない。

戦いの中で、ジオウIIは視界の隅に奇妙な影を捉えた。

誰と戦うでもなく、頭を抱えてよろめきながら歩く者。紫色の肌をした、ハゲタカめいたアマゾンがいる。

理性と獣性の狭間で揺れるその姿に、ソウゴは何事かを直感した。眼前の敵を斬り捨てて、ハゲタカアマゾンに駆け寄る。

「礼れいじ二にさんー」

忘れるわけもない。かつてアナザーアマゾンネオによって、ハゲタカのアマゾンへと作り変えられた男をソウゴは知っている。我蘭製薬の社員にして、アナザーアマゾンネオ／高坂大介の友人、守衛礼二もりえいじ。彼の面影を認め、ソウゴは大声で呼びかけた。反射的に突き出された拳を軽くいなし、両肩を掴む。

「……………わ、たしは……………俺は……………」

「意識が残ってるのか……………だったらッー！」

ハゲタカアマゾンを守るように、ジオウⅡが構えた。迫る群れを薙ぎ払い、背後に向かつて叫ぶ。

「思い出して！ 俺達があのアナザライダーを……高坂大介を助けるんでしょ！」

「だ、い、すけ……高坂……大介」

「そう、アンタの同僚で、友人だ！ だから……引つ込めた腕をもう一度伸ばすんだ！  
今度は離さないために！」

仮にアナザアマゾンネオを倒したとしても、高坂大介という個人の憎しみはそこに起因しないものだ。息子の死を無かったことにされた瞋恚は察するに余りある。だからこそ、彼の友人である礼二の力が必要だ。

自分では高坂大介を救えないのだ、とソウゴは理解した。彼の憎悪を理解できても、常磐ソウゴという一個人は『共感』に至ることが難しい。彼は我蘭製菓など知らないし、大介についても礼二から聞いた程度の情報しか持たない。直接顔を合わせたこともほとんどない。

それでも、大介を救うことが王たる者の使命だと、常磐ソウゴが考えたのならば、答えは一つである。

救える者を、救うべき者へと導かねばならない。

三度目は無い。今度こそ闇の中へ手を伸ばし、獣人の王を人の道へと引き戻すのだ。



殺壊破毀撃斬喰肉狙襲跳喰食骨殺壊、声。

「■■■■して！ ■■■■あの■■■■ーライ■■■■を……■坂大介■■■■ける■■■■よ！」

喰肉狙聴声識識識抜——こえが、きこえる。

ひとの、こえ。ききおぼえのあるこえが、ききおぼえのあるなまえを、よんでいる。

そのなまえに、あたまがいたむ。なにかが、のどのおくにひつかかるようできぶんがわるい。

なぜ、『わたし』によびかける？ ……『わたし』？ 『れいじさん』はわたし、わか

殺らな溜力殴——ちがう。ちがう、違う。そうではない。そこは重要ではない。見えて

きた、見えてきたぞ。

だいすけ、大介、高坂大介。

わたしの……私の、友の名前。私が助けなかった、私が助けられたはずの男。だからこそ、ここに来た。他ならぬ『私』が、今度こそあの男に手を伸ばすために。

「そう、アンタの同僚で、友人だ！ だから……引つ込めた腕をもう一度伸ばすんだ！

今度は離さないために！」

夜通し反芻したのだ、分からぬわけがない。今呼び掛ける声は、私を手助けすると言ってくれた男の声だ。呼び掛けられているのは、私が怪物になってしまったからだ。

もう二度とあのような後悔はゴメンだ。

私は、今度こそ……私の友と向き合おうと決めたのだ。



その場の誰もが、瞠目していた。

表情を変えることのない仮面をつけた者達が、敵も味方も区別なくあからさまに動揺している。

ジオウⅡの背後にいたハゲタカアマゾン、青いジャケットを羽織った中年の男に変わった。

「礼二さん……戻ったんだー」

「……ああ、私は、全て覚えているとも。私が過去に残してきた後悔の結果がコレだ。責任は、私が取ろう。最後は、任せてくれるかな」

中年の男……守衛礼二が決然と言った。全てを己の責と見做し、艱難辛苦に挑む覚悟を決めていた。その目つきは鋭く、悲壮さを帯びている。

「分かっているよ。元々そういう作戦だよ。だからさ、今は下がって。ここは、俺達が引き受ける！」

人間の気配を察してか、アマゾン達が一齐に飛びかかる。しかしソウゴには全てが見えていた。ジオウⅡの触覚が時計の針めいて回転し、世界を切り取った。



数は10。全員が跳躍し、空中から襲いかかる。一網打尽にする方法はいくつかあるが、考える限り最大の奇手で打って出る。

『タイムマジーン！』

時空の彼方より、巨大なバイクが飛来する。巨大バイクは人型に変形し、その胸部に『ロボ』の文字が光る。銀色の鉄巨人、あらゆる時空を駆けるタイムマシン……タイムマジーンが大地に降り立った。

タイムマジーンの登場により、襲い来るアマゾン達が薙ぎ払われる。その時を待っていたかのように、更なる助っ人が参陣する。仮面ライダーウオズ・フューチャーリングキカイであった。

「我が魔王、タイムマジーンをお借りしたい」

「いいよ、やっちゃって！」

許可が下りるや否や、ウオズが礼二を抱えてタイムマジーンに乗り込んだ。内部機構を一通り参照すると、全員から光の粒子を撒き散らす。

『ビヨンドザタイム！フルメタルブ레이크！』

光の粒子はウオズが体内に仕込む無数の極小機構ナソツルである。背部装甲から四本の機械腕を展開してタイムマジーン内部に接続、立体映像型仮想コンソールに素早く何かを入力し始めた。

7メートル以上あるタイムマジーンの全身が激しく発光し、物理法則を超越した変身に軋み始めた。タイムマジーンの内部機構が、装甲の組成が、全て書き換えられているのだ。

前腕部から肩部、胴体、そして下半身の順に装甲が増えていく。全身を金と黒の追加装甲が覆い、頭部に赤く光る双眸カタラライを備えた仮面型装甲が嵌め込まれた。

右腕と左腕は明らかな左右非対称である。杭打ち機めいた機構を備えた右腕と、短い砲身を装甲の内側から迫り出させた左腕。全身を冷却するためか、あるいは戦闘用の機構か、機体各部から強烈な冷気を噴射している。

右肩部に種類の異なる4つの砲身が加わり、装い新たに鉄巨人が両腕の武器を構えた。

タイムマジーンが元から備える形態モードチェンジ変化の仕様ではない。機体そのものを全く異なるモノへと変生させた決戦機巧兵器形態、タイムマジーン・フューチャーリングキカイである。

「こんなことも出来たのか……」

「あの巨大な触手の束は私が打ち崩そう。引き続き、存分に戦うといい」「わかった……これなら、いける気がする！」

ジオウは機械の巨人に背を向けて、眼前の敵と相對する。

ウオズが操るタイムマシーンは、アナザーアマゾンネオが形成した触手の大樹に向かっ走り出した。



無数のアマゾンの中に、悠は見知った気配を感じた。人が変じた溶原性細胞アマゾンと、全く同じ感覚を覚えた。

ウニアマゾンの胴体を両腕で引き裂きながら、アマゾンオメガが次の攻撃に備える。ウニアマゾンは爆発することなく、干からびた屍となった。

「ヤツらまで来たのか……!」

悠は溶原性細胞アマゾンの脅威をこの場の誰より知っている。人間をベースとしたアマゾン達はどれも非常に強力であるが、これは溶原性細胞アマゾンも同様である。

そのような危険な存在が次々と降って湧いてくるというのだ。街の外に広がれば、一瞬にして食人の怪物は人間達を喰い尽くすだろう。それだけは絶対に避けねばならない。

ヒョウアマゾンが目の前に現れると、後ろ回し蹴りで首筋に右脚を引っ掛け、上半身を斜めに斬り下ろす。四肢に備えるヒレ状の器官は、全てを斬り裂く生体凶器だ。強靱極まるアマゾンの胴体すら易々と両断する。

背後から殴りつけるヒヒのアマゾンに肘打ちで怯ませ、腹部に腕を押し当てて斬り上

げた。次いで向かってきたゾウムシアマゾンを前蹴りで蹴飛ばし、挟み打とうとするバラアマゾンの右腕を受け止めると、両腕の筋力で押し折った。

『VIOLENT BREAK』

アマゾンオメガがベルト右側のグリップを引き抜く。無骨な鎌が黒い液体を垂らしながらバラアマゾンの首筋に引つ掛かり、頭が胴から切り離された。バラアマゾンが失った頭部を修復しながら襲いかかるも、風の如き一撃に阻まれる。ゲイツリバイブ疾風の蹴りが、周囲のアマゾン達に次々と突き刺さった。

「ゲイツ君！」

「二人で切り抜けるぞ！ 俺が援護してやる！」

『フィニッシュタイム！ リバイブ！』

ゲイツが青い風となつて飛び上がると、アマゾン達の目の前に『きつく』の文字が浮かび上がった。多くのアマゾンを一度に多く狙う、必殺の連撃である。

『百烈！ タイムバースト！』

ゲイツが空中で分身し、20体のアマゾンに飛び蹴りを喰らわせた。降り注ぐ一撃に吹き飛んだアマゾン達が、活動を停止する。着地する一瞬でゲイツリバイブは青き疾風から赤き剛烈へと姿を変えていた。

ゲイツの視覚が地面の鳴動を捉えた。下から突き出した青い触手を、ジカンジャック

ロー・のこモードで叩き落とす。

「アナザーアマゾンネオの触手か！ 地面に張り巡らせるとは——」

「さながら大樹のようだ、かな？」

ゲイツの背後に影が降り立つ。仮面ライダーウオズ・フューチャーリングクイズが、ゲイツの背後にいたヘビアマゾン叩き伏せていた。

「ウオズ！ 貴様、どうやってここに！」

「この私は分身だとも。だが、私の本体があの大樹から力を奪い取った。共に戦うに不足はしない、と言わせてもらおうか」

僕もいるよ、とアマゾンオメガが声を掛ける。その声は穏やかだ。

「では3人で、少々派手に行こうか。我が魔王ともう一人の分身があの大樹を切り崩す。私達は出来る限り、ここでアマゾン蹴散らすとしよう」

「勝手に仕切るな！ ……だが悪くない作戦だ。悠、ついて来れるな？」

「ああ。ここでコイツらを食い止める……！」

三人の前にアマゾン達が群がり始めた。

ここからは後半戦、徹底抗戦の第二ラウンド。

両陣営は未だ切り札を隠したまま、戦いは新たな領域に突入する。

C Part-3へつづく。

## C Part 3

仮面ライダーウオズ・フューチャーリングキカイの力によって、大幅な強化改造を施されたタイムマジーンを以てしても、彼の前に立つ相手はあまりにも強大であった。

縦横無尽に枝を広げ根を張るは、アナザーアマゾンネオが生み出した無数の触腕を束ねたる大樹めいたナニカ。タイムマジーンの全長は7メートル強といったところだが、この『獣の大樹』は高さ約17メートル、直径約5メートルという規模に膨れ上がった。いた。

的が大きいと言えば聞こえは良いが、その実苦戦を強いられる相手だ。地中に張った触手を不意打ち気味に突き出したり、触手自体が枝分かれして襲いかかってくる上に、威力も高い。おそらく素のタイムマジーンであれば装甲を一瞬で引き裂かれて爆散していたかもしれない、とウオズに思わせる程である。

ウオズはタイムマジーンに防御態勢を取らせ、同乗させたままであった守衛礼二の方を向いた。

「……………これ以上は危険だ。少々強引な手段ではあるが、貴方を安全な場所へと避難させ

る。構わないかな？」

「すまない、宜しく頼む」

「では、脱出ポッドに乗っていただくよう」

タイムマジーン内部で生成した特殊な脱出ポッドに礼二を乗せ、背部から射出する。ウオズは仮装コンソールを操作して破損した装備の復元に取り掛かった。

手数の多さではウオズも遅れは取らない。全身から冷気を噴射して足下に散らばるアマゾン達を凍らせ、胴体部分の装甲を展開する。胸部が観音開きめいて左右に開かれ、『キカイ』の文字を刻んだ仮面……ウオズ自身の顔面を模した砲塔が迫り出す。昼の陽光を反射して白く光る氷のアンカーを、胴体部分から地面に向けて多数射出して姿勢を固定すると、砲塔に光が充溢し始める。

獣の大樹の頂に座するアナザーアマゾンネオは、様子を見るように動きを止めた。真正面から受け止めるつもりらしい。

狙い通りだ。

「この一撃……受け切れると思うな！」

50メートルの距離を隔てて、白い光線が風を切る。頂点付近に直撃を受けた獣の大樹は、着弾地点を中心に凍結し、触腕が樹氷を形作る。

まさに絶対零度。暴走する機械すら鎮静する、機巧の一撃である。

ウオズはタイムマジーン右腕の機構を展開する。炸裂機構を利用して強靱な杭を打ち込む杭打ち機が、凍りついた大樹の頂点……アナザーアマゾンネオが立っている触手の玉座に叩き込まれた。

原理は単純明快、凍結した対象を巨大質量と衝撃を持つて粉碎する。

タイムマジーン右腕部に衝撃が走る。しかし手応えはまるでない……いや、右腕の動きが止まっている。

つまり、撃鉄の反動ではない。ウオズはモニターを遷移させて巨大な右腕を見遣る。

「ば、バカな……!?!」

あまりの衝撃に驚愕の声を上げる。当然であった。杭打ちの右腕を止めていたのは、巨大な一本の腕だったからである。

虚空から伸びる腕に付け根はない。右前腕部を象った触手の集合体が、空中に開いた穴から突き出ている。アナザーアマゾンネオの覚醒に伴う時空の歪みを、攻撃に転用された形となった。

押さえつけられた右腕は全く動かない。超高密度構造体である巨大な触手の腕は、タイムマジーンの右腕をそのまま握り潰さんばかりの膂力を発揮しようとしている。

ウオズの判断は早かった。左腕に搭載した砲台を右肘に向けて撃ち、タイムマジーンの右前腕部を無理矢理切り離す。右肩の砲塔から爆裂する弾丸を撃って牽制しつつ、後



方に跳躍して距離を取った。

タイムマジーンの右腕を修復しながら、ウオズは次の一手を練る。

「私一人で引き受けようと思っただけが……どうやら救援が要るらしい」

凍りついた大樹の内側から、無数の腕が出現し、一瞬にして氷が割り砕かれる。状況は完全に振り出しに戻った……否、むしろ悪化している。本体であるフューチャーリングシノビの力を利用して、この怪物の弱体化を図ってなお、届かなかったのである。

事ここに至って、ウオズは非常に落ち着いていた。

策略の一切を、単純な暴力で踏み躪る強敵の前に、彼は自身の出せる『最大の火力』を投入することを決意した。

戦術・戦略で届かぬというならば、残るは力比べのみである。

その思念が届いたか、はたまた同じことを考えていたのか、獣の大樹の真下を駆け回っていたもう一人のウオズが、新たな分身を作り上げた。



ゲイツリバイブ剛烈の鉄拳が、ヒヒアマゾンに突き刺さる。殴り倒されたヒヒアマゾンの屍が、干からびて固まった。

溶解性細胞アマゾンの特徴だ。彼らの死体は他のアマゾンとは異なり、溶解することなく固まる。さながらミイラの如く、である。ゲイツは事前に悠から聞かされていた。

……よもやそれを、実際に見ることになるとは、ゲイツはおろか悠自身も思っていないなかつたのだが。

ゲイツの背後に迫る影を、ウオズ・フューチャーリングクイズが打ち据える。ジカンデスピア・ツエモードから小さな爆弾を生成して、アマゾンの群れに投げつけると、5体のアマゾンに向けて出題した。

「問題。現実中存在する鳥類のうち、猛禽類であるものを、5つ答えよ！」

理性を喪失したアマゾンが、聞く耳を持つハズはない。しかしウオズが投擲した爆弾は時間経過で徐々に肥大化していく。クイズが成立しているのだ。なぜならば……このクイズは『無回答を不正解として扱う』からである。

時間切れにより、爆弾が稲妻を撒き散らす。雷撃を受けたアマゾン達が爆散した。無回答ゆえの不正解である。

「ふう……キリがないな」

「ジリ貧だな。ウオズ、何か手立ては無いのか？」

「二つだけある。少々賭けになるが、向こうで戦っている我が魔王と合流し、アマゾンの大群を一箇所に集めて一網打尽にするという方法だ。アマゾンを引きつける役と、追いつける役がそれぞれ一人ずつ必要だ」

アマゾンの集団は、アナザーアマゾンネオが座する『獣の大樹』付近のアマゾンと、そ

ここから分断された集団の二種に分かれている。ゲイツ達が戦っているのは後者だ。この二つの集団を、一つの巨大な群れに変えて、何らかの方法で一気に撃破する手段があるという。

「何を企んでいるかは知らんが……まあいい。俺がアマゾンを引きつけよう。ウオズ、言ったからには全力でアマゾンを俺の方に向かわせろ」

「元よりそのつもりで言ったからね。ゲイツ君もしつかりとアマゾンを引きつけてくれたまえ」

ウオズがアマゾン達の間を縫って駆け抜ける。ゲイツがジカンジャックロー・のモードを構えると同時に、アマゾンオメガが目の前に現れた。

「話は聞いたよ。一人でやろうなんて無茶だ、僕も一緒に——」

「いや、お前は先に行け」

「どうして……」

アマゾンオメガの肩が僅かに震えた。目の前の男がやろうとしていることは、恐るべき蛮勇である。しかしゲイツは一切退かない。

「お前の知識は恐らくジオウにとつても役立つだろう。共に戦えば心強かるうさ」

「……何か別の理由がある、のかな？」

「さてな。……早く行くんだ、手遅れになる前に」

ゲイツの言葉を受けて、アマゾンオメガが走り出す。

見送ったゲイツが、胸部装甲を開いてゲイツリバイブ疾風へと変じた。ウオズの作戦に備えるためだ。何が起こつてもいいように、回避性能の高い疾風を選んだ。

『フィニッシュタイム！ 不可思議マジック！』

『ビヨンドザタイム！ クイズシヨックブ레이크！』

遙か彼方から声が響いた。ウオズの必殺戦術が炸裂する、とゲイツは確信したのだが。

アマゾン達が一斉にゲイツの方を向いた。

何やら視界が明るくなった、と感じた時にはもう遅い。

「皆様、ボーナスタイムのお時間にございます。スポットライトに照らされた彼にご注目下さい」

何やら勿体つけたナレーションが響いた。ウオズの声だ。

「これより、この付近にいる皆様には彼を追いかけただきます。制限時間は1分。一度でも触れたならば特別な報酬が、時間内に誰も彼に触れなかった場合は……罰ゲームが待っております。果たして制限時間内に、触れる者は現れるのでしょうか？ 早速ですが……スタートです！」

最悪のパターンであった。ウオズの戦術とは単純、アマゾン達に異様なゲームを仕掛

けて強制的にゲイツを追わせるというものだったのだ。ゲイツの頭上に光球が浮かび、青い装甲を煌々と照らしていた。

「ウオズ、貴様ー！ーッ！」

「安心したまえ、私も君を援護するとも！　もしも逃げ切ったならば、スペシャルな報酬を約束しよう」

「そういう問題ではない！」

言い終えるより早く、獣達が大挙して襲い来る。ゲイツは後方にジオウの姿を捉え、一直線に進み始めた。



ジオウⅡの二刀が、最後に残った一体のアマゾンに突き刺さる。サイキョーギレードが備える仮面型パーツをジカンギレード側に装填し、サイキョーギレードと合体させて巨大な剣を完成させた。

『サイキョーフィニッシュタイム！』

時冠王剣最終形態・サイキョージカンギレードから烈しい光が放たれ、ヘビアマゾンと両断した。

「これで全部……かな？」

ジオウⅡの周囲は完全な凍土と化した。夏に見る光景とは思えぬほどに、空気に至る

まで冷え切っている。

ソウゴがウオズに貸し出したタイムマジーンにより、冷気が周囲に振り撒かれた結果、この一帯のアマゾン達は殆どが凍結した。別の時空から召喚されたアマゾンも、アナザーアマゾンネオが作るアマゾンも、一切の区別なく氷の棺に閉じ込められている……二つの例外を除いては。

アナザーアマゾンネオと、彼が形成した『獣の大樹』だった。

ジオウⅡは凍土を歩いていく。獣の大樹はタイムマジーンが相手でも苦戦する巨大なる敵、ならばこそ彼のすべきことは、タイムマジーンを操縦するウオズを助けることだ。

ジオウが大樹の根元に辿り着くと、ウオズ・フューチャーリングシノビが音も無く傍らに出現する。

「このウオズは本体？」

「元々は私が本体だよ、我が魔王」

「だよね。……で、アレはどうする？」

アレ、とは眼前の大樹である。大部分が凍結しながらも、血管めいて蠢く様は不気味極まる。

「いよいよ本格的に、かの冒流的な巨樹を切り崩すための場が整った。そこで、一つ協力

願いたい」

「いいよ、何をすればいい?」

ウオズが新たなミライドウオツチを起動させた。他のウオツチに比べると大きく、何やらダイヤル機構のようなものを仕込んでいる。

『タイヨウ!』

『アクション! 投影! ファイナリータイム!』

ウオズがミライドウオツチを装填し、新たな姿へと変じた。ウオズを中心に膨大な熱波が広がり、凍結した地面が一瞬でアスファルトの肌を晒す。

『灼熱バーニング! 激熱ファイティング! ハイヨー! タイヨウ! ギンガタイヨウ!』

ウオズの胸部に赤く輝く恒星が取り込まれる。高熱を放ちながら、上半身に宇宙的意匠を持つ大型の鎧が被さった。胸部から両肩、そして下半身にかけて十字型に覆うソレは、胸の太陽を中心に様々な惑星を象る太陽系めいた追加装甲である。

頭部には燃える炎のように赤く揺らめいた『タイヨウ』の四文字と、燃え盛る太陽の紋章が刻まれた。

かつて、仮面ライダーギンガというライダーがいた。宇宙の法の執行者、全てのものを破滅させる純粋な力の化身。時空の彼方から飛来した恐るべき異物の力は、ウオズが

手にすることとなった。

この姿こそは仮面ライダーウオズ・ギンガタイヨウフォーム。

ギンガが残した力の一つ。大いなる炎熱にて威容を示す、太陽の力を操る形態である。

「宇宙最強・ギンガタイヨウ、そして強化したタイムマジーン……私達の力で一気にケリをつけよう。トドメは任せるよ、我が魔王」

「オツケー！ なんかいける気がする！」

ジオウⅡが再びサイキョージカンギレードを構える。瞬く間に巨大な光刃を形成すると共に、威圧的な『ジオウサイキョウ』の八文字が刃の側面に煌く。

ジオウⅡの背後で大きな駆動音が響いた。ソウゴが貸し出したタイムマジーンが、全ての武装を修復して最後の攻撃準備に入ったのだ。

ウオズが大樹の背後に回り込み、タイムマジーンと直線上に並ぶと、もう一人のウオズ……フューチャーリングシノビが高速で印を組みながら跳び回り、『獣の大樹』に赤い札を貼り付けていく。

『ビヨンドザタイム！』

『ファイナリービヨンドザタイム！』

怒涛の勢いで押し寄せるは、全力の波状攻撃に他ならない。



タイムマジーン・フューチャーリングギカイが全身の砲塔をアナザーアマゾンネオに向け、一斉に内部の兵装を撃ち放つ。同時にウオズ・ギンガタイヨウフォームが巨大な魔法陣型の円を展開し、全てを焼き尽くすが如き熱線を照射する。

『フルメタルブ레이크！』

『バーニングサンエクスプロージョン！』

絶対凍結の冷気と、絶対焼却の熱線。極限冷熱の衝突が、10メートルを超える大樹を徐々に崩壊させていく。

「今だ！ 忍法・火遁の術！」

『ビヨンドザタイム！ 忍法・時間縛りの術！』

『フィニッシュタイム！ 一撃カマーン！』

ウオズ・フューチャーリングシノビが、ジカンデスピア・カマモードに炎を纏わせ、貼り付けた札に刃を突き刺した。貼り付けられた無数の札が反応し、連鎖的に爆発を起した。

触腕を無数に束ねた冒瀆的大樹が、黒ずんだ塵となって崩れていく。

「今だ！」

『キング！ ギリギリスラッシュ！』

最後の一撃は、ジオウIIが手にした光の剣によって行われる。大上段に構え、真っ直

ぐ縦に振り下ろす。『ジオウサイキヨウ』の文字が横倒しになると同時に、大いなる王の一閃は過たず『獣の大樹』を切り裂いた。



午前1時。静寂が訪れる。

氷の蒸発が起こした煙が、一帯に立ち込めていた。役目を終えたタイムマジーンは、元の姿に戻り時空の彼方へと去っていく。ウオズが生み出した分身は光の粒子となつて消滅した。

「やった……かな？」

「さて」

ジオウⅡとウオズ・ギンガタイヨウフォーム、二騎が周囲を見回している。蒸気の中に影を見出し、二人が身構えた。

煙が晴れ、中天の太陽が青黒い全身を照らす。アナザーアマゾンネオが、十字路の中心に立っていた。

「まだか……でも」

「我が魔王、どうやら我々の作戦も無駄ではなかったらしい」

ウオズが自らの背後を指差す。ゲイツが無数のアマゾンを引き連れてこちらに向かつてくるが、何体かのアマゾンは輪郭が朧げになり、世界から消え去ろうとしていた。

「時空の歪みが、別の世界から本来のアマゾン達を呼び寄せていたらしい。それが、アナザーアマゾンネオが弱体化化したことで元いた世界に戻っていく。後に残ったのは……」

「アナザーアマゾンネオが生み出したアマゾンだけだ！」

跳躍する影が風を切る。アマゾンオメガがジオウⅡの隣に着地した。

「ソウゴ君、アイツは！」

「まだ健在って感じかな。でもだいたい力は削れた気がする」

遅れて到着したのは、ゲイツリバイブ疾風。1分間の逃避行を終えて、かなり疲弊しているようだ。

「ゲイツ！……何してたの？」

「ウオズが仕掛けたボーナスタイムとやらに巻き込まれた。お陰で俺は1分間、あのアマゾン達から逃げ回る羽目に……なんだコレは、力が満ちていくぞ」

ゲイツの全身が黄金に点滅する。ウオズがゲイツに約束した『スペシャルな報酬』が発動したのだ。

「削られた体力が回復していくのか……これなら、まだいけるぞ」

「そっか。じゃあ……行くよ、皆！」

『ジオウ！』

ジオウⅡが両側のライドウォッチを取り外し、代わりに本来のジオウライドウォッチ

とカラフルな別のライドウオッチを起動する。三つの色で『ライダー』の文字が記された仮面は、それまでの3人のどれにも当てはまらない形をしていた。

『ジオウトリニティ!』

「えっ」

「何!?!」

『ジオウ! ゲイツ! ウオズ!』

ジクウドライバーに装填されたライドウオッチ……ジオウトリニティライドウオッチ側面部のダイヤルを回すと、空から二つの光が降り注ぐ。しし座で最も明るい恒星・レグルスが二人を照らしている。

「やめ、待てジオウ、なあぜええ……」

「わ、我が魔王、これはツ!?!」

電気に打たれたように全身を震わせながら、ゲイツとウオズがジオウの背後に回った。ジオウがジクウドライバーを回転させると、背後の二人が飛び上がった。

『ライダータイム! 仮面ライダー! ジオウ!』

三人がそれぞれの基本形態に戻ると同時に、全身がゲイツとウオズの顔面を本体として腕時計めいた異形に変形した。仮面から上下に帯状のパーツが伸び、ジオウの右肩にゲイツ、左肩にウオズの仮面が装甲となつて接続される。更にジオウの顔面までもがス

ライドして胸部装甲と化した。

『トリニティタイム！ 三つの力！ 仮面ライダージオウ！ ゲイツ！ ウォズ！ トーリーニティ！ トリニティ!!!』

ジオウの頭部に新たに浮かび上がったのは、ジオウトリニティライドウオッチと同じく黄色・マゼンタ・水色の三色で彩られた『ライダー』の文字。『イ』の文字が時計の長針を形作り、並ぶように黄色の短針が光る。

両肩の腕時計型装甲は、時計のベルト部分を新たな仮面の両側に一体化させた。全身各部は黒と黄金に塗り替えられ、荘厳さと威風を漂わせる。

この姿は、本来の歴史に存在しない『新たな未来』を拓く力。

魔王も知らぬ可能性、それこそは未だ記録されざる新たな王の誕生に他ならない。

この時代に存在しない三つの力が一つとなり、新時代の幕を開ける。  
三位<sup>トリニティ</sup>一体ここにあり。祝福せよ、新たな王の誕生を。

「ひれ伏せ！ 我こそは仮面ライダージオウトリニティ！ 大魔王たるジオウと、その家臣ゲイツ、ウォズ。三位一体となって未来を創出する、時の王者である！」

仮面ライダージオウトリニティが、ウォズの声で大仰な口上を述べた。

凱旋するは時の王者、祝福するはその家臣。

時代を画する審判の日を超えて、まだ見ぬ未来を作り上げるのは、王者が結んだ絆

だった。

ジオウトリニティとアマゾンオメガが、背中合わせに敵を見据える。

一方には大量のアマゾン。もう一方にはアナザーアマゾンネオ。

悠が微かに笑みをこぼす。その笑みは誰に知られることもなく、一瞬の後には全身を引き締めて相手に向かい合った。

「終わりにしよう。憎しみも、歪んだ力も……ここですつー！」

「ここですつー……行くぞ、皆ー！」

獣達が吠える。飢える苦しみか、あるいは獲物を見つけた喜びか。

どちらにせよ、これで終わらせなければならぬ。憎悪によって生み出され、在り方を歪められた人間達、憎悪の根源たる獣の王。その全てを救うために。

最後の審判を下すべく、全ての戦士が駆け出した。

C Part 4 へつづく。

## C Part-4

許せぬ。その思いだけがある。

目の前にいる奇妙奇天烈な何かが、自分を阻む壁となった。四つの仮面など、ふざけているとしか思えない。

己を阻む者であるならば、全霊で叩き伏せる。そして自分は、宿願を果たす。故にこそ。

目の前の敵には、負けられないのだ。



ジオウトリニティが目指すのは、アナザーアマゾンネオただ一人。

1対1では誰一人として勝てなかった相手だが、三位一体をもつてすれば負けるはずはない。

ジオウトリニティの内部に広がる空間には、時計を模した円卓が置かれている。物理法則を超越した現象により、彼らは時に肉体の主導権を入れ替えつつ意思疎通を図っているのだ。

「まずは俺から！」

ソウゴが拳を構えると同時に、ジオウトリニテイも同じ構えを取る。今、ジオウトリニテイの主導権はソウゴにあった。

距離を詰めて右拳を喰らわせる。アナザーアマゾンネオも同時に拳を突き出し、クロスカウンターの要領で互いの一撃が交差した。重い衝撃と轟音が響く。両者共に怯むが、アナザーアマゾンネオの方が受けたダメージは大きく、負傷に大きくよろめいてその場で硬直した。

「代われ、ジオウ！」

「任せるよ！」

『ゲイツ！』

右肩に備えるゲイツの仮面が光り、構えが変わる。アナザーアマゾンネオの左腕から、ピラニアのヒレめいた刃が繰り出される。しかしジオウトリニテイはそれよりも速く左腕に鋭いパンチを打ち込み、黄金のエネルギーを纏う右脚で強烈な横蹴りを浴びせた。

『ジカンザックス！ You me！』

ジカンザックス・ゆみモードを手元に召喚し、的確に両腕を狙い撃つ。攻撃を受けたことで距離が離れた隙にアナザーアマゾンネオは右腕から大きな弾丸を放つが、力を込



めた一矢に掻き消され右腕ごと撃ち抜かれた。

「お見事。では私も行こう」

「しくじるなよ、ウオズ」

『ウオズ！』

『ジカンデスピア！ カマシスギ！』

左肩、ウオズの仮面が光ると共に、ジカンデスピア・鎌モードがジオウトリニテイの両手に握られる。アナザーアマゾンネオは、鎌の大振りな斬撃を右腕から生成したブレードで迎え撃つ。赤熱するブレードの突きを、ジカンデスピアで叩き落としてから踏みつけ、鎌の刃で袈裟斬りにする。踏みつけられた剣が地面に刺さったまま抜けず、逆袈裟に斬られて大きく後退した。

「次は俺が！」

「ご随意に、我が魔王」

『ジオウ！』

『ライドハイセイバー！』

主導権がソウゴに戻り、ジオウトリニテイの手に新たな剣が握られる。マゼンタに輝く鋸状の刃、回転する長針を持つ時計型機構、そして刃に記されし『ハイセイバー』の文字。超針回転剣ライドハイセイバー。世界の破壊者たる10人目の平成ライダーの

力が生んだ、平成ライダー達の力を宿す剣である。時計の機構で長針を回転させ、使うべき力を選択する。

『ヘイ！ エグゼイド！ デュアルタイムブ레이크！』

ジオウトリニティがライドハイセイバーで斬りつけると、二つ重なった『HIT！』の文字と共に二度の斬撃が叩き込まれる。攻撃そのものが二重化しているのだ。アナザーアマゾンネオが繰り出す剣との鏝迫り合いを、二重の斬撃で押し潰すことで制し、次の一手に取り掛かる。

『ヘイ！ リュウキ 龍騎！ デュアルタイムブ레이크！』

大きく身体を捻り、右方向への回転を加えた薙ぎ払い。ライドハイセイバーが纏う炎が、アナザーアマゾンネオに向かって飛ぶが、身体を反らせて回避される。

「狙い通りだ」

炎の刃は形を変え、巨大な炎の龍となった。背後からアナザーアマゾンネオを貫通し、ジオウトリニティすら通り抜けて、アマゾンの集団を一斉に焼き払う。アマゾンオメガへの援護を兼ねた攻撃だった。

ジオウトリニティはライドハイセイバーを放棄し、再び拳を顔の前で構えた。次の攻撃に備えるためだ。

「お、おのれ……お前達は……！」

アナザーアマゾンネオが呻いた。彼の憎悪が力を増幅させる。青紫のオーラが全身を包み、虚空に開いた5つの孔から触腕が繰り出された。ジオウトリニティはその全てを手刀と蹴りで捌いて距離を詰める。

「今日この日まで生きてきたのは、過去の清算のためだ！ 失われた命に報いるため、俺自身の憎しみを晴らす、そのためだ！ だからこそ……ここで負けるわけにはッ！」

ジオウトリニティの周囲の空間から次々と触腕が飛び出す。20以上の触腕を受け切ることはジオウトリニティにも不可能、万事休すか……と思われた、次の瞬間。

黒い閃光が、全てを斬り裂いた。



アマゾンオメガはただ一人、数を大きく減らしたアマゾンの集団と戦うこととなった。

されど戦力に一切の不足はない。特別なアマゾンとして創り上げられた彼は、自らが積み上げたアマゾンとしての生の中で己の力を高めてきた。

言うなれば『水澤悠／仮面ライダーアマゾンオメガ』としての戦いの歴史であり、喰うか喰われるかの運命を生き抜いてきた男の全てであった。

『VIOLENT BREAK』

ベルト右側のグリップから鞭を生成し、周囲を薙ぎ払うように振るう。にじり寄る者

は飛び退き、近づきすぎた者は強かに打たれる。逃げ遅れた一体を絡め取って、跳躍の勢いを乗せた貫手を腹部に突き刺した。引き抜くと同時に爆発し、人間の姿に戻る。アマゾニアマゾンネオの力が弱まったことで、自ら作ったアマゾンを維持する力が減少したのだ。

「早く逃げてー！」

柄の先を小太刀めいた形状に変えながら叫ぶ。アマゾン達が襲いかかるより早く、緑のツナギを着た運送業者らしき男が逃げ去った。

自棄めいて殴りかかるクワガタアマゾンの右拳を刃の腹で受け止め、小太刀で脇腹を斬り裂く。逆手に持ち替えて傷口に突き刺し、抉るように切り抜け、零れ出る血液を払って次の標的を捉える。

その四肢は何者をも寄せ付けぬ爪牙であり、一切を切り裂く刃であった。爪牙を用いるは、人喰いの獣を狩るがため。守りたいものを守るために、狩らねばならないものを自ら定め、戦い続ける。

今の彼が守りたいのは、優しく温かな、希望ある未来の可能性だった。明光院ゲイツという一人の青年に、いつかの己を重ね合わせながらも、ゲイツの選択は自身と異なるものであった。その結実こそ、悠自身も目撃した三位一体の姿だろう。

これは、水澤悠が選ぶことのできた道の一つかもしれない。だからこそ葛藤はある。

それでも……悠は彼らの創る未来を信じた。常磐ソウゴ達が生きる『新たな未来』を守ることを選んだのだ。

アマゾンオメガは赤い双眸で敵する者達を見つめる。彼らは姿形こそ自分の知る溶原性細胞アマゾンだが、倒せば爆発と共に元に戻る。

理屈がどうあれ、人間に戻せるという一点だけは確かだ。それ故に、悠は彼らの身に牙を突き立てることを躊躇わなかった。

背後からこちら側に向かう熱源を察知し、身を翻して避ける。龍の似姿を成した赤い炎が、アマゾンの集団を焼いた。ジオウからの援護である、という事情を察知し、畳み掛けるべく群れめがけて突撃する。

残るアマゾンは7体。急ぎこれらを撃破し、全ての決着をつけねばならない。

『VIOLENT STRIKE』

大跳躍から一閃、右脚の刃を踵落としの要領でへビアマゾンの肩口に突き刺し、地面に引き倒す。残り6体。

突進を仕掛けるサイアマゾンの顔面に飛び膝蹴りを喰らわせ、倒れたまま無防備な胸元を勢よく踏みつける。残り5体。

四方から同時に4体が仕掛けた。アマゾンオメガはしやがみ込んで力を溜め、4体との距離が限界まで縮まった瞬間に全身を回転させ、矢鱈滅多に全方位を斬り刻んだ。一

撃の威力こそ低いが、鎌鼬めいた斬撃の嵐に飛び込んだアマゾン達は無事では済まない。一体は倒れたところに小太刀を投げ、もう一体はうつ伏せの背中に貫手を突き入れる。起き上がった2体のうち、距離の近い方に拳の連打を浴びせ、飛び回し蹴りを鳩尾に入れた。爆発で飛んできた小太刀を掴み、背後に回った片割れを見ることもなく、逆手持ちに刃を右脚へと突き刺すと、振り向き様に両腕の刃が首筋を通過した。

残りは1体、バラアマゾン。左手から棘の付いた蔦を伸ばし、地面に叩きつけて威嚇してきた。右手の鋏は油断なく顔面近くに構えられ、難敵との戦いを予見させる。

しかしこちらには時間がなく、よって手短に終わらせねばならない。  
「ハアアア……」

気合の息から飛びかかり、両足で交互に蹴りつける。一撃で蔦を切断し、続く刃がバラアマゾンの左肩に突き刺さった。飛び蹴りの衝撃を踏ん張って殺し、鋏がアマゾンオメガの上半身を斬り裂かんとする。

衝突音。鋏は届くことなく、アマゾンオメガの左腕に弾かれた。飛び離れて着地し、静かにバラアマゾンの爆発を見届ける。

全てのアマゾンを撃破した。残るは『オリジナル』ただ一人。

『オリジナル』のいる方を向くと、ジオウトリニティが四方八方から触腕に貫かれんとしていた。爆発めいた勢いで走り出すと、アマゾンオメガは一瞬のうちに距離を詰めてジ

オウトリニテイの正面に立った。

時間が鈍化する。アドレナリンの過剰放出で、悠には全てが止まって見えた。このままでは二人まとめて串刺しである。全方位に対応する手段を取る必要があった。打つ手無しか……否、一つだけある。一度だけ使ったことのある手段だ。アレならば全ての触腕を撃墜し、逆転の一手に繋がられる。制御できるかが問題だ。いや、制御するのだ。でなければ生きて戻る未来はない。生きるために戦え、そして喰らえ。念を強め、全身の筋肉を強張らせる。細胞が蠢き、全身から黒い硬質の棘が突き出され——全ての触腕を断ち切った。



熱蒸気を放出し、アマゾンオメガが膝をついた。何やら恐るべき攻撃を予見して、地面に伏せていたジオウトリニテイがゆっくりと立ち上がる。

「何が、起こった……?」

「見ての通りだよ、ゲイツ君。悠君の力だ。どうやら彼には、我々も知り得ない未知の可能性が眠っていたらしい」

周囲の地面が砕かれ、穴だらけとなっている。アマゾンオメガがその全身から繰り出した無数の棘は、敵の攻撃だけでなくその周囲すらも刺し貫いたのだ。

ジオウトリニテイは、静かにアマゾンオメガに手を伸ばす。手を取ったアマゾンオメ

ガが立ち上がり、再び腰を低く据えて構えた。

アナザーアマゾンネオが走り出した。こうまで立ち上がるか、なぜ私の邪魔をする……！ 曠恚に身も心も焦がし、ジオウトリニティに殴りかかる。ジオウトリニティは突き出された拳を掌で受け止めた。

「勝つのは……私だ！ 貴様だけは許さない！」

「それでもいいよ。だけど俺は勝つ！ 未来を生きるために……！」

「未来だ?!? 戯言だッ！」

腕の力を強め、押し切らんとするアナザーアマゾンネオ。その膂力をジオウトリニティが上回り、腕を掴んで豪快な背負い投げを極めた。

「戯言なんかじゃない！」

「ならば……何だというのだ、その未来は！」

「俺が王として創る、最高・最善の未来だ！」

ソウゴが叫ぶと同時に、アマゾンオメガが畳み掛ける。起き上がろうとしたアナザーアマゾンネオに飛び蹴りを浴びせて距離を離れた。

「行こう、悠さん」

「トドメは任せるよ、ソウゴ君」

『VIOLENT PUNISH』



『トリニティ！ タイムブ레이크！ バースト！ エクスプロージョン！』

アマゾンオメガの右腕が備える、生体凶器アームカッターの黒く硬質な刃が肥大化した。大跳躍からすれ違い様に斬り抜け、アナザーアマゾンネオの後方に着地し、もう一度大きく飛び上がった。

続くはジオウトリニティ。三色の『キック』や『きつく』の文字を一直線に並べ、アナザーアマゾンネオの胸板に強烈な飛び蹴りを叩き込む。それと同時にアマゾンオメガが、空中から更なる一撃……瓦割りめいた手刀の構えから刃を以て斬り裂いた。両者の攻撃はほぼ同時にアナザーアマゾンネオに直撃し、二方向からの衝撃にその身を完全に固定される。

必殺たる大切断の一刀、そして時の王者の一撃を受けた獣の王は、大きく黒い血を噴き出しながら爆散した。



「うああっ……」

爆風が晴れると、青いジャケットを着た男が地面に倒れる。高坂大介……アナザーアマゾンネオの変身者であった男は、力と変身の資格を完全に喪失した。

「終わったあ……」

ジオウトリニティが地面にへたり込むと、変身が解除されて再び三人に戻った。ゲイ

ツとウオズがソウゴの両手を取って立たせる。

「お疲れ様。でも……まだやることが残ってるんだよね？」

「そうだね。ウオズ、礼二さんは？」

傍らにいたはずのウオズは姿を消していた。しかしソウゴが呼びかけた一瞬の後、虚空にマフラーがたなびいてウオズと守衛礼二が現れた。相変わらず、万能の従者であった。

「……」

「ウオズ君が助けてくれてな……大介のことは、私に任せてくれ」

礼二がスーツの埃を払い、言い終えた瞬間であった。

アナザーアマゾンネオに変身する『資格』……アナザーウオツチが砕け散る。修復不可能なほどに砕け、もはや原型はない……のだが、破片が妖しく紫色に光り始め、一つ一つがアーク状の放電現象を起こす。何が起るといえるのか。

その光景を物陰から見ている男がいる。タイムジャッカー頭領スウォルツ、大いなる時間停止能力者が、壇上に上がるうとしていた。

スウォルツが満面に笑みを浮かべると共に――。

『新たな時空の門』が開く。

C Part—5へつづく。

## C Part—5

「何が起こっている……!?!」

誰が最初に言ったのか。いや、その場の誰もが思っていたであろう。

破壊されたアナザーウオッチから、ブラックホールめいた何かが生まれようとは。

直径10メートル前後の巨大な円形の穴が開いている。外縁部からは紫色の電光が走り、地面を焼き焦がす。穴は強烈な引力を放っており、踏ん張っていなければおそらく飲み込まれてしまうだろう。

「まさか……『時空の門』!」

「ジオウ、何か知っているのか!」

ゲイツがソウゴに呼びかける。

「スウォルツが言っていたんだ。それが何なのかは分からないけど……」

「どうすれば閉じる!?!」

「アナザーアマゾンネオを倒せば閉じるとは聞いたけど、保険があるって言った。コレのことだったのか……!」

ソウゴの脳内で全てが繋がった。スウォルトツがアナザーアマゾンネオを作った理由、目の前で開いた巨大な時空の門、そして戦いの最中でアナザーアマゾンネオが繰り出してきた、時空の門を用いた数々の攻撃。全てはスウォルトツの計略だったのだ。

ともかく、今は全員でここから逃げなければならぬ。ソウゴはゲイツに手を引かれて走る。悠は速やかに自力で離れ、ウオズは礼二を連れて引力の届かない距離まで移動した。時空の門が持つ引力は凄まじいが、引力自体の届く距離は長くないようだ。

ふと、何かに気づいた礼二が、傍らにいたウオズの方を見た。

「……大介は、大介はどこにいる!？」

「あちらに……残ったままですね」

「何ということだ……!？」

高坂大介を助けなければ。その一心だけが礼二を衝き動かしていた。時空の門の前で蹲っている大介に向かって、礼二は一直線に走り出した。大介は徐々に浮かび始めており、もはや抵抗する気力すら失っていた。

「大介エーツ! 私はどこだ! ここにいるぞオーツ!」

「……礼二か……!？」

礼二の必死の叫びに、大介が反応した。差し出された手を半ば反射的に掴むも、迷いから力が抜けていく。

「俺は……もういい……取り返しのつかんことをしたのだ」

「そうだろうな！ だからとてここで死ぬなど許さないぞ大介！」

「……生きて、償えとでも」

大介は正気だった。アナザーウオッチに復讐心を増幅され続け、その精神は磨り減っていたが、自身の所業についてはこの場にいる誰よりも理解していた。

多くの人間を人喰いの怪人に変え、少なからぬ犠牲者を出し、拳句の果てには都市をも破壊した。その結果を引き起こした自分に、何を以て贖うことができようか。

しかし、それでも礼二は止まらない。

「そうだとも。お前は、私の友だった。だからこそ、お前の友である私がここで手を引くなど出来ない！ 戻れ大介、二人でもう一度やり直すぞ！」

「結局俺が戻ったところで変わるものなどない。お前がいようと、何が出来るか」

「出来るとも！ お前が辛い時に傍らにいてやらなかったこと、それが私の罪だ。だから今度こそは、共に立って歩く道を選ぶ！ 私はそう決めたのだ！」

礼二は必死であった。ここで大介を取り戻せなければ、諸共に死ぬ覚悟であった。時空の門は何処に繋がっているか、そもそも出口があるかすら分からない。おそらくあれに呑み込まれれば、二度と元の世界には戻れないだろう。確信はないが、予感があった。

「私はお前の味方であり続ける、信じてくれ大介！」

礼二がそう言い終えた瞬間、世界の進みが一瞬にして止まった。時空の門の引力すらも届かない、絶対の停止があつた。高坂大介ただ一人が、この停止世界の中で動くことを許されていた。重力を感じて地面に落ちると、新たな闖入者の影を見出す。

紫色の服を着た大男が、静かにその場に降り立った。スウォルツであつた。スウォルツは大介の手を取り、悪魔めいて第二の契約を持ちかける。

「お前はよくやった。特別に褒美をやろう……俺の役に立つてもらおう」

「な、何を」

「この時空の門を安定させるための生贄が必要だ。お前か、その無力な男か。どちらかを選べ。今回はお前の意見も聞いてやろう」

スウォルツは語る。時空の門は本来時空の歪みから開いたもの。それを安定させるには『門となるべきもの』が必要であり、それが今回は人柱であつたという話だと。かつて門の役割を果たしていたアナザーウォッチが破壊された以上、次に捧げるべきは別の供物なのだ……それがスウォルツの語る全てであつた。

大介は5秒ほどの間を置いて、言った。

「俺が行こう」

「ふむ……その貧弱な男でなくとも良いのか？ 見たところ、貴様の憎む企業に縁深いようだが」

「……復讐は終わった。もう何もできることはない」

諦めを滲ませる声色で訥々と語る大介に、スウォルツは心底から奇怪なものを見たような表情をしつつ、門に掛けた時間停止を解除した。時空の門が渦を巻いて動き始める。徐々に強まる引力に、二人は目を細めた。

怪訝そうな表情を見せるスウォルツであったが、次の瞬間には笑みを浮かべ、労いの言葉をかけた。

「お前はよくやった……我が野望の礎となるがいい」

そう言つて、スウォルツが大介の肩を叩いた次の瞬間。

大介がスウォルツの右腕を、思い切り掴んだ。

「何、をする……貴様！」

スウォルツの怒声が静かな世界にこだまする。誰にも気取られぬように積み上げた計画が、ここで破綻しようとしている。その事実がスウォルツの精神に焦燥を呼び起す。

「できることはない、というのはお前も同じだ！　さんざ利用した挙句生贄まで要求するだ!?!」

「貴様とて乗ったクチだろうが！　何を今更——ぐあッ!?!」

空間が爆ぜる。その衝撃によって、スウォルツ達の距離が時空の門から離れた。虚空

に開いた大穴に、無数の亀裂が入っている。アナザーライダーを起点として発生した大きな時空の歪みが、アナザーライダーの消滅に伴ってこの世から無くなるうとしているのだ。

「早くしなければ時空の門が崩壊する！ 新たな時空の門となれ……！ さもなくば、ヤツを殺すぞ！」

スウォルツは必死である。両手に力を蓄えて必殺の一撃を繰り出さんとしていた。大介は身構えながらも、その場から一歩たりとも動こうとはしない。彼もまた決死の覚悟であった。

「俺は生きて罰を受ける。消えない罪を背負って歩くと決めた……ここではもう誰も死なせない！ お前も何処かへと帰れ！」

「くだらん！ お前の意見を聞いた俺が愚かだったようだな……！ 覇道の1ページとなるがいい！」

両手から放つ紫色の光弾が大介に直撃する——ことはなかった。

「早く逃げて！」

女性の声を聞き、大介が横に飛んだ。スウォルツの光弾は一瞬だけ停止し、見当違いの方向へと飛んで行った。

「チイツ、時間を掛けすぎたか！」



時空の門はみるみるうちに大きく罅割れ、末期の光を放つ。数秒後には激しく発光し

大介の視界が、光に包まれる。



常磐ソウゴは十字路の真ん中で、首を傾げていた。

あれだけ危険な予感を漂わせていた『時空の門』は、その姿を消していた。それどころか、アナザーライダーの変身者であった高坂大介は一仕事終えてきたように疲れ切った風態で、自分の後ろに座り込んでいたのである。

「皆、大丈夫!？」

白い服装の少女、ツクヨミが急いでソウゴ達のもとに駆け寄ってくる。

「……………ツクヨミ!? どうしてここに!？」

ソウゴの疑問はツクヨミに集中する。なぜ何も事情を知らないはずの彼女が、ここに現れたのだろうか。というより、アナザーアマゾンネオが作ったアマゾン達が出没しているのに、なぜ外出していたのか。

その疑問に答えるべく、ツクヨミは経緯を語り始めた。

「あの怪物…………アマゾン達がいきなりクジゴジ堂の屋根を踏んで跳び越えていったのよ。思わず外に出たら大量のアマゾンが街の方向に向かって行くのを見たわ。誰も連

絡は取れないし、私一人で出来ることは少ないけど、やれることはやってみようと思つて」

曰く。

街に到着した頃にはもう既に戦いが粗方終わっていたということ。

自分の介入から状況が悪化する可能性を避けるために、少し離れた場所に隠れていたこと。

タイムジャッカー・スウォルツの介入があつたため、こちらには可能な対応をしたこと。

この三つをソウゴ達に説明したのちに、今度はツクヨミがソウゴ達に質問した。

「ところでこの状況は……何？ 何があつたの？ どうしてあの人はスウォルツに襲われてたのよ？」

とはいえ、事情がよくわかっていないのはツクヨミもソウゴ一行も同じであつた。ゲイツがツクヨミの肩を叩き、自らの方に顔を向けさせた。穏やかな表情でゲイツは言った。

「帰るぞ。説明は、帰りながらでもできるからな」

ゲイツはソウゴに目配せして、視線を前方に注いだ。先程まで座り込んでいた男は、旧友と肩を組みながら何処かへと歩き去っていく。

二人の男が一度だけ、ソウゴ達のいる方を向いた。彼らは疲労を感じさせながらも、満足げな笑顔で何事かを言つて、再び歩き始めた。

ぎこちない二人三脚を、二人は笑顔で見送つた。

「そうだ、ソウゴ君」

悠がソウゴに呼びかけた。悠の左手には緑色のライドウオッチが握られている。アマゾンオメガの力を宿したそれは、水澤悠の歴史そのものであつた。差し出された左手を、ソウゴとウオズが見つめていた。

「僕も、君の創る未来を信じてみたいと思う。君にとって必要なものなら……」

悠の目は真剣であつた。ウオズは無言でソウゴを見守つている。

ライドウオッチとは、仮面ライダーの歴史だ。そこには文字通りに、仮面ライダー達が積み重ねてきた戦いの系譜が詰まつている。これを継承することは同時に、ライダーから歴史を奪い去ることもあつた。ソウゴはしばらく俯いてから、顔を上げて言つた。

「俺には、受け取れないよ」

若き王の選択は、従来とは異なるものであつた。

「ウオズ。このライドウオッチは、俺が集めるライドウオッチの中には入つてないよね」  
その言葉に驚きつつ、従者は王の問いに答える。

「確かに、その通り。彼は我々も知り得ない別の物語を歩んできた仮面ライダーだ。よって、継承すべき力としては計上されていない……しかし、良いのかい？」

「……オーマジオウを倒して、最高最善の魔王になる。それが俺の目標だ。だけど、俺達に本来関わりのない歴史まで奪ったなら、結局それはオーマジオウと同じなんだ」

審判の日、時代を画する日の果てに生まれるオーマジオウ。彼の後にも先にも、ライダーは存在しない。全ての歴史を奪い去った絶対的存在として、彼は君臨し続けたからだ。

「たとえそれが、オーマジオウを倒す糸口になったとしても、この力は、受け取っちゃいけない気がする。だから……いつかもう一度会う時まで、アンタはアンタの歴史を生きさせて欲しい」

ソウゴの言葉に悠が微笑みを浮かべる。

『そういう道も選べる男だったのか』と、彼はソウゴに対する印象を新たにした。

悠は差し出した手を引つ込めて、その場から一步退がった。

「わかった。それが君の答えなら、僕も尊重するよ」

悠は密かにゲイツを見遣る。それに気づいたゲイツが、悠を見てニヤリと笑った。なるほど、ゲイツは正しく魔王の友だったのだと、悠は確信した。

遠くから獣の声が聞こえた。異形の二輪、ジャングレイダーが悠の下へと独りでに参

上する。ハンドルに引つかかっていたフルフェイスヘルメットをかぶり、悠はサドルに跨った。

別れを察して、その場の皆が手を振り始めた。悠の知る『いつか』とは異なる旅立ち。異邦にて得た新たな友との記憶は、悠の心に深く刻まれた。

「君達に会えたことは、僕にとって幸運だった。ありがとう、またいつか……次は、何でもない日に会えたらいい」

誰にも聞こえないような小さな声で、悠は呟く。

一度だけ手を振り返すと、一際大きな遠吠えと共に青年は何処かへと向かって走り去った。



午後7時。ある高層ビルの屋上に、三人の男女が集っていた。

歴史改変者タイムジャッカー。オーマジオウに代わる、新たな王を擁立するために集った彼らは、これまで幾度となく障害に阻まれた。

「アハハハハハ！ 渾身の策も台無しね、スウォルツ。策士策に溺れる、って言葉は知ってる？」

タイムジャッカーの紅一点、オーラは躊躇なくスウォルツを嘲笑する。彼女としてスウォルツが何を企んでいたかは知らない。だが、何事かを隠していたスウォルツが自ら

の策に嵌ってしくじったということとは直感できた。オーラにとっては格好のネタであつた。

「いささか不確定要素を盛り込み過ぎた、という点については事実だ。いつそ次は、奇を衒わずに正攻法で行くのも手だろうな」

オーラの嘲笑も、それを向けられたスウォルツ当人は何処吹く風である。ジオウが継承すべき力は残り少ない……つまり、魔王の誕生が着々と迫る中で、明らかにこの男だけは何事か確たる余裕を保っている。その抛り所を知る者はいない。二人のやりとりを傍観していた少年……ウールは、状況の異様さに苛立ちを覚えていた。

「スウォルツ、結局アレは何だったんだ？」

ウールが懐疑を込めた質問をスウォルツに投げかける。アレ、とはまさしく今回スウォルツが大いに重きを置いた『時空の門』である。

しかし、問われたスウォルツはと言えば。

「そう難しい話ではない。ただ、一つだけ言えることがあるならば——我々にとつても、アマゾンには早すぎた」

虚空を見つめながら、はぐらかすだけであつた。

……とはいえ、スウォルツの内心は決して穏やかではなかつた。時空の門が崩壊する寸前、彼は何が起こつたのかハッキリと理解していた。

時間が止まった世界に響いた女の声、認識外の闖入者。介入に気づけなかったとはいえ、その人物が何者かを知らぬスウォルツではない。

未来より現れたレジスタンスの少女。今はツクヨミと呼ばれている彼女は、自らと同じ時間停止の力を持つ。その理由にスウォルツは辿り着いていた。

「あの力……まさに我が妹……このようなことが、あり得るとはな……！」



ある朝のことであつた。

常磐ソウゴは一人で、見たことも聞いたこともない場所に訪れていた。そこは何年も前に閉鎖されたらしい広々とした公園であつた。

木製の塔や、間の空いた橋で構成されたアスレチック。

少し低めの柵で囲われた、誰もいない地帯。

淀んで底が見えない川に浮かぶ、アヒルを模した錆び付いたボート。

枝が伸び放題になったまま枯れている樹木。

整備されずに野晒しになっている備品の数々。

土地はとても広く、一通り歩いて回るだけでも時間を要した。生命の気配は一切無く、自分の歩く音がやけに大きく聞こえる。

彩いろの褪せたような、寂れた世界だつた。寒々しい風景と吹き抜ける乾いた風に、ソウゴ

は体の芯まで冷え込みそうに感じた。

園内を歩いていると、奇妙な形状のバイクを見つけた。柵に寄りかかるように停まっている赤色の車体を、ソウゴは知っている。一つだけ違うのは、どこか愛嬌すら感じさせる前面部の双眸……ライトの部分が黄色いことだった。

他に誰かいるのかもしれない。ソウゴはバイクの前を通り過ぎて、早足で歩き始めた。

園内の一角には、教会を模したような建物がある。その近くには倒れたバリケードやドラム缶が散乱していた。誰が開けたのか、扉が開いていたので、ソウゴは音を立てないように入ろうとした。

「誰？」

ソウゴの全身が震え上がった。自分ではない、別の人間の声が聞こえたのだ。男の声だった。恐る恐る振り向くと、3メートルほど離れた地点に、黒い服を着た少年が立っている。その傍らには同じように黒衣を纏った少女がいた。少女は一切の感情を削ぎ落としたような無表情で、ソウゴを見つめていた。ソウゴはその視線に身震いしつつ、自分の名前を明かす。

「俺は常磐ソウゴ。君は？」

「俺は——。この子は——」



一瞬の間が空く。ソウゴは違和感を覚えた。名前は聞き取れたし、今の名乗りで覚えただハズなのに、思い浮かべようとしてもハッキリと出てこない。少年と少女が何者であるのか、という考えを一旦切り捨てて、ソウゴは質問を変えた。

「ここで、何をしてるの？ どう見ても、閉園してない？」

「まあ、そうなんだけど……でもここは——」

「楽しかった場所」

「そう。俺達の、楽しかった場所」

少年は少し俯いてから、少女の方を見た。ソウゴに視線を向けていた少女は、しゃがみこんで地面を指でいじり始めていた。彼女の目にはソウゴも少年も映っていないかった。少年も無言で少女と向き合い、少女と一緒に黒い土を両手でいじる。

少年は穏やかな笑みを浮かべていた。少女も微笑んでいる。どこか幼子の遊びめいており、ソウゴは微笑ましく思った。

「楽しい？」

「楽しい」

「ああ。笑ってるよ」

「……そっか。俺も、一緒に遊んでいい？」

ソウゴが尋ねる。たまには童心に帰ってこういう遊びをするのも悪くない、と思った

のだ。少年はいいよ、とだけ言った。

黒い土を一箇所に集めて、低めの円柱を作る。小さな石ころを円柱の面に沿うように七つほど並べて、最後に木片を真ん中に置いた。

「誕生日ケーキだ」

ソウゴが呟く。率直な感想である。黒い土でできたバースデーケーキ。

誰のために作ったのか、とソウゴは少年に尋ねた。

「これは……誰のだろう?」

もとは少女が作ろうとしたものだ。少年に心当たりはないらしい。

「じゃあ、誕生日じゃなくて、記念日?」

「何の?」

「俺と、君と、彼女との出会いを祝して……でどうかな? 今日が初対面だけどき」

ソウゴは二人に向けて笑顔を見せる。名も知らぬ少年少女だが、彼にとつては未来の民であった。少女は地面を見つめていたが、少年はソウゴに笑みを返した。

ソウゴの脳内に声が響く。聞き覚えのある日常の声だった。帰らなければ、と思った途端に、視界が白く明けていく。

「あ、ゴメン。俺、そろそろ行かないといけないんだ。皆のところに帰らないと」

「そっか……ありがとう。ちよつとの間だけど、楽しかったよ」

少年と少女が立ち上がり、ソウゴから離れていく。

「――、俺達も行くぞう」

「了解」

ソウゴは二人に向けて手を振った。少年と少女が、手を繋いで歩いていく。少年が振り返って、ソウゴに言った。

「あのさ、良かったら……これからも、俺達のこと、覚えててくれないかな？」

言葉を受けて、ソウゴが返す。

「分かった。きつと忘れないよ。いや……君達のごことは、忘れちゃいけない気がする」

少年と少女から感じていた違和感。それは恐らく、彼らが去ってしまった何者かだからではないか。ソウゴはそのように直感していた。意味や理由を知るには、常磐ソウゴはまだ若い。それでも、いつか時が経ち、彼らがソウゴに託した願いの真意を知る時は来るだろう。やがて降る星の彼方に、面影を見出すその時が。

歩き去る二人に、ソウゴは姿が見えなくなるまで手を振り続けた。

視界が一瞬にして変転する。ソウゴは自分が物置の中にいることに気がついた。彼の目の前には、6枚の翼を広げた天使の絵が描かれた壁があった。その手前の机に、使い古されたストールと、二つの赤い腕輪が置いてある。腕輪は赤黒く濡れていたが、ソウゴは構わず手を伸ばす。

不意を打たれるように腕輪が青く光り、いつの間にかソウゴの手には青い腕時計が握られていた。生きて此処に在った、誰かの歴史を宿す時計。ソウゴはそつと机の上に時計を置き、物置を出て行つた。



午前7時、目覚まし時計のアラームが鳴り響く。寝ぼけ眼を擦りながら、新たな一日が始まった。

「おはよう、ソウゴ君。昨日はよく眠れた?」

誰よりも早起きだったのは、最年長者にして時計店クジゴジ堂の店主、常磐順一郎じゅんいちろうだった。彼は今日も陽気に料理の腕を振るう。

「おはよう、おじさん……」

「どうしたジオウ、寝付きが悪かったのか」

食卓には既に全員が揃っていた。常磐ソウゴ、明光院ゲイツ、ツクヨミ、ウオズ。昨日まで一緒にいた食客ゲストは、別天地へと去ってしまった。

「昨日は相当激しい戦いがあったものね。今日は何も無いし、ゆっくり休むといいわ」

「そうじゃなくてさ……夢を見たんだ」

「夢? また妙な予知夢でも見たんじゃないだろうな?」

「お待たせー、今日の朝ごはんだよー。あ、そうだ。少し気が早いかもしれないけど、今

日の夕飯は鶏鍋だよ。あのお友達……悠君だよ、彼の分も食材買っちゃったんだ。長持ちするものでもないし、早いうちに食べないと傷んじやうからね。よろしくー」

ゲイツが訝しげに言うと同時に、順一郎が配膳を始めた。今日は和食だった。焼き鮭に白菜の漬物、細かく切った大根を入れた味噌汁と白米。朝に食べるには重すぎない、ほどよい量の食事だった。

常磐ソウゴはある種の時空観測能力を持つ。それは時々予知夢として現れ、現実には何らかの事象を引き起こすきっかけになったことがあった。

「近いといえば近いんだけど、ちよつと違うかな」

「どんな内容かな？ 断片的にでも話してくれば、私がそこから推理してみせよう」  
ウオズが興味津々とばかりに身を乗り出す。王の従者として、彼は自らに出来ることは可能な限りするつもりだった。

ソウゴは少し押し黙る。夢の内容はほぼ全て覚えている。

覚えている、のだが……今しばらくは自分の記憶の中にしまっておこう、と思った。

「あとで話すよ。今は、とりあえずごはんにしよう」

順一郎が自分の分を配膳して席についた。

一日の始まりは、食への感謝から。食卓についた全員が、手を合わせて言った。

「いただきます」

箸が食器をつつく音が、静かな朝に響き始めた。  
おわり